

## 自然の技術としての建築術——カントの体系思想

望 月 俊 孝

その理性批判の革命性のゆえに、同時代人メンデルスゾーンによって、「すべてを破砕する者」と評されたカント。しかし、『純粹理性批判』第二版（一七八七年）の序言におけるカント自身の弁明によれば、批判の「第一の効用」はたしかに「否定的消極的」なものであり、思弁理性の使用を可能的経験の限界内に制限するということにあるにせよ、理性批判には同時に、市民生活に平穏と安全をもたらす「警察」の仕事にもたとえられるような、「積極的にしてきわめて重要な効用」がある（vgl. B XXIV-XXV）。いまや形而上学は「はてしない紛争〔訴訟沙汰〕の戦場」と化して、人間理性は「完全な無政府状態 völlige Anarchie」（A IX）に置かれている。それゆえ、理性は批判を介して初めて、あらためて形而上学の建築の作業に安心して取り

組むことができる。批判とは、来るべき学としての形而上学の、体系建築のための基礎（der Grund, das Fundament）「土台」の探索であり、基礎固め（die Grundlegung）であり、あるいはその建築設計プランである。つまり、批判はたんに破壊的ではなく同時に建設的であり、そのようなものとして、形而上学の体系への予備学 Propädeutik〔準備教育〕なのである。

形而上学のこれまでのやり方を変更するあの試み、幾何学者や自然研究者の事例に倣ってわれわれが形而上学の全体的な革命、eine gänzliche Revolutionを企てることによる変更の試みのうちに、純粹思弁理性に関するこの批判の仕事が存している。批判は方法についての論考で

あって、学の体系そのものではない。しかしながら批判は、この学問の全体的な見取り図 *der ganze Umriss* [略図、概略、輪郭、スケッチ] を、その外枠 *Grenzen* [限界] に関しても、全体的な内的分枝構造 *der ganze innere Gliederbau* に関しても描くのである。じつさい、これは純粹思弁理性そのものにそなわる独自の事柄であるが、この理性は自分が思惟の対象を選択する多様な仕方に関して自分自身能力を測量し、自分に課題を提出する多くの仕方をもあらかじめ完全に枚挙し、そのようにして、形而上学の体系のための設計図 *Vorriß* [あらかじめの設計図面、投影図] を描くことができるし、またそうすべきなのである。(B XXII-XXIII、傍点引用者)<sup>1)</sup>

革命、裁判、政治、航海などのメタファーとならんで、建築のメタファーは批判の叙述において印象的かつ頻繁に用いられており、しかもこのメタファーが批判の本質にかかわる重要性をもつことは、「純粹理性の建築術」という概念において明白である。質料 *Materie* [素材] と形相 *Form* [形式・かたち]、構成的 *konstitutiv* と統制的 *regulativ* という基本的な概念対とも共鳴しあうカントの建築メタファーは、そもそものいかなる意味を有するのか。はたしてその建

築術は、自然を効率的かつ暴力的に支配しようとする近代の技術理性に依拠した、モダニズムの建築の精神を反映するものなのか、否か。

拙稿は、カントの学問体系構想を「技術による自然支配」というモダニズムの文脈で捉える通例の解釈に対抗して、むしろその建築術思想が、『判断力批判』(一七九〇年)における「自然の技術」の概念の出現をいわば予告し、準備するものであることを明らかにしようとする。すなわち、技術理性批判という論点をカント解釈の基本理念として根底にすえたいうえで、自然の趣に聴従する自然の技術としての建築術という新たな解釈の道筋を探ることが、本稿の主要課題である。<sup>2)</sup>

## 一、学問体系の技術としての批判的建築術

カントの批判哲学において、「建築術 *Architektonik*」の概念は第一義的には学問論の文脈にあり、「体系の技術 *Kunst der Systeme*」を意味している。たとえば『純粹理性批判』(第一版、一七八一年)方法論の第三章「純粹理性の建築術」を、カントは次のように書き起す。

わたしは建築術のもとに、体系の技術を理解する。体系

的統一とは、通常一般の認識を初めて学問にするもの、つまり認識の単なる集合から一つの体系を作るものである。それゆえ建築術とは、われわれの認識一般における学問的なもの、das Scientifiche についての教え Lehre [学問論]であり、それゆえ必然的に方法論 Methodenlehre [方法の教え]に属する。(A832=B860)

ここにも見られるように、建築術の概念は「体系」ないし「体系的統一」の概念と不可分に結びついており、カントの建築術の性格を見きわめるためには、当然のことながら、その体系概念の実像を正確に把握する必要がある。<sup>(4)</sup>

もちろん、そのさいにわれわれは、体系を嫌悪し呪詛し、もはや体系なるものは不可能だとして、アフォリズム、断片、エッセイ等の表現形式を重用してきた現代哲学の思想傾向を無視することはできない。<sup>(5)</sup> とりわけ、カント形而上学体系の建築術という本稿の主題に関連しては、デリダの「脱構築 déconstruction」が気に懸かる。<sup>(6)</sup> 作品 Werk をつくるのではなく道 Weg を歩むことを思索の課題としたハイデッガーの「解体 Destruktion, Abbau」、プラトン以来の存在論ないし形而上学の「解体」という哲学的営為の本質を「脱構築〔解体構築〕」というかたちでデリダが受けとめたとき、それはたんに否定的な「破壊」に終始する

ものではなく、むしろ「解体」をとおしての「再構築」という肯定的・建設的な意味を兼ね備えたものであった。そしてこれは、少なくとも外形的には、カントの批判的な建築術と同型的である。しかしそれはただちに、両者の思想内容の同型性をも意味するものではない。カントの批判的建築術は、デリダの脱構築とどのように切り結び、いかなる現代的意義をもちうるものなのか。少なくとも脱構築思想の批判的意義、すなわち、へ外的、感覚的、物質的、自然的なものゝを消去しつつへ内的、知性的、観念的、精神的なものゝの真理の純粹現前を思考のテロス〔目的、終極〕とする「現前の形而上学」の階層秩序、とりわけその「存在—神—目的論 onto-théo-téléologie」の体制を転倒しようとする脱構築的思考の批判的意義を汲み取らないまま、たんに歴史的・文献学的な興味からカントの体系建築術に注目するだけであるとしたら、それは時代錯誤の懷古趣味というそしりを免れないだろう。

しかるに、先の引用箇所につづく以下の叙述に接するとき、カントの体系建築術の思想は、現代の脱構築的思想潮流に真っ向から逆らうものであるようにも見える。

理性の統治、die Regierung のもとでは、われわれの認識一般は、狂詩曲 Rhapsodie であってはならず、それ

らはむしろ一つの体系をなさねばならないのであって、この体系においてのみ、われわれの認識一般は理性の本質的な諸目的を下支えし、促進することができるのである。ところで、私が体系のもとに理解しているのは、一つの理念のもとでの多様な認識の統一のことである。この理念は、一つの全体の形式についての理性概念であり、しかも、これによって多様なものの範囲 *der Umfang* ならびに諸部分相互の位置がア priori に規定されるかぎりでの理性概念である。それゆえ、学的理性概念は、この概念に一致する全体の、目的と形式とを含んでいる。すべての部分は、この目的の統一に自らを関係づけ、またこの目的の理念において相互に関係しあうのであるが、この目的の統一のゆえに、いかなる部分が欠けても、その他の諸部分が知られていれば気づくことができるし、いかなる偶然的な付加も生じなければ、ア priori に規定された自己の限界をもたぬ無規定な大きさの完全性も生じない、ということになる。(A832-3=B860-1)

カントはここで理性の統治・支配を語り、認識一般が狂詩曲(ラプソディー)のようにきれぎれの断片の集合 *Aggregat* となることを嫌って、あらゆる認識が体系として一つの全体のア priori な理念のもとに目的論的な仕方統一され

ることを求めている。そして、この記述を表面的にながめた場合には、そこに「理性」ロゴスの全体主義的専制支配の影を読みとるという、初歩的な誤読もおこなわれかねない。そのうえ、狂詩曲が楽想の自由な展開を本質とするものであり、それにひきかえ、建築物が物質的な固定性・固定性を免れないものであることから、構成員の自由を否定する堅固な専制支配という印象は強化されうるかもしれない。

しかし、ここで狂詩曲が否定的に語られるのは、それが諸認識の無法則の自由、すなわち、統治の全面的否定としての無政府状態 *Anarchismus* (統治の原理たる執政官アルコーンの欠如における無秩序) を象徴するかぎりにおいてであるし、そもそも統治・支配・統制は、必ずしもただちに全体主義的専制支配となるわけではない。少なくともカントの批判的政治哲学においては、あらゆる市民の自由と平等を基本理念とする法的支配としての共和的体制 *republikanische Verfassung* こそが統治・支配の理想形態とされているのであって、このことは、彼の建築術的体系論を吟味するさいにも、つねに念頭におかれなければならない。

また、建築の固定性による論難も浅薄で一面的にすぎる。たしかに、建築物のなかには物質の無機的・没生命的な集

塊（マッス）という印象のみをあたえるものもあり、とりわけ経済的かつ工学的に合理主義的な「近代建築」（たとえば高度経済成長期に飛躍的に増大した日本の箱型集合住宅群）には、明らかにその傾向が強い。<sup>7</sup>しかし、建築の技術的目的合理性のみにとられぬ芸術——十九世紀以降の現代ドイツ語で *Kunst*、カントの言葉では「美しい技術 *schöne Kunst*」——としての建築作品のなかには、物質素材の構成を通して精神の自由を表現するものや、あるいは生物の有機的生命の生動性を強く印象づけるものもある。一例として、ブルーノ・タウトの名前をあげておこう。カントと同じケーニヒスベルクに生まれ、そのことを誇りとしつつ、建築家としてのめざましい業績を欧州に残し、日本で数年間の「休暇」を過ごして、トルコに没したタウト。彼による桂離宮の建築美の「発見」は有名であるが、<sup>8</sup>それに先立って、そもそも彼自身の建築の思想と実践そのものが、建築を「釣り合い *proportio*（比例、均整、均衡）の芸術」として「建築の美」を重視する、有機体論的な性格を帯びたものであった。<sup>9</sup>

あたかもこれに呼応するかのように、カントの建築術もまさに有機体論的であり（その美については別の機会に譲る）、カントの体系建築の記述は、随所でただちに生物有機体のアナロジーへと直結してゆく。たとえば先の引用箇

所につづいて、カントは以下のように述べている。

それゆえ、この「体系としての」全体は分肢に区分されている *gegliedert*（連接 *articulatio*（分節））のであって、集積 *gehäuft* されている（累積 *coaccervatio*）のではない。この全体は、たしかに内的に（内的な受領包摂によって *per intus susceptionem*）成長することはあっても、外的に（付加によって *per appositionem*）成長することはない。それはちょうど動物の身体 *ein tierischer Körper* のようなものであり、じつさいその成長においては、分肢 *Glied*（構成要素）が付加されるのではない。むしろ、プロポーションの変化をおこすことなく、あらゆる分肢が自己の目的のために、よりいっそう強くなり、よりいっそう有能になるのである。（A833=B861）

のちにカントは、『判断力批判』の第二部で、批判的自然目的論の反省的統制原理に基づく生物有機体論を本格的に展開する。カントの学問体系の建築術は、生物の有機組織化 *Organisation* に認められる生命の生動性とのアナロジーのもとに理解されなければならない。しかも、有機体における全体の目的は諸部分の自由を抑圧するのではなく、むしろあらゆる部分（分肢）を適材適所に配置しながら、

各構成要素の目的の達成を推進し、そのことによって全体の生命の高揚に寄与するものと理解されている。カントの体系の建築術は、あの共和的な統治・統制の理念とも重なり合いながら、<sup>10)</sup>生命有機体論的に構想されているのである。

このことの確認は、考察の端緒として、きわめて重要である。生物有機体としての建築。ここに見られる建築術と有機体とのつながりは、カントの体系の技術としての建築術が、「自然の有機的技術 *die organische Technik der Natur*」とも呼ばれるような自然的な根本性格をそなえるものであることを、大いに期待させるからである。以下、この筋に沿って、慎重に考察を展開してゆくことにしよう。

## 二、批判哲学の建築術的な履歴

一七六九年がカントに与えた「大きな光」を受けて、翌七〇年の教授就職論文『可感的世界と可想的世界の形式と原理』では、理性批判の基本論点の一つである「空間・時間の観念性」への洞察をすでに十分に獲得しながら、おそらくはそれゆえにまた、批判哲学の本格的な成立を妨げる難問をかかえこんだカントは、それ以降、第一批判の公刊までに、なお十年余りの沈黙を強いられるという思索の難

渋を経験した。ただし、そのなかにあつて、へ批判的理性の建築術」という学問論の構想自体は、第一批判の公刊に先立って、かなり早い時期に確立していたものと推察される。

その沈黙期の半ば、一七七六年十一月二四日の日付けをもつマルクス・ヘルツ宛書簡において、カントは、後の『純粹理性批判』の本質的課題と、超越論的方法論の構成とを先取りするかたちで、以下のように述べている。

実際のところ私は、自分が研究している領域において、若干の功績を挙げようとする希望を捨ててはおりません。私が長いあいだ何もしていないように見えるために、各方面から非難を受けています。しかし実際のところ私は、あなたとお別れしてからこの数年、いまだかつて決してなかったほどに体系的にしかも持続的に仕事をしてきました。……最後の障害はこの夏やっと克服したばかりのところですよ。……あらゆる経験的諸原理から独立に判断する理性、つまり純粹理性の領野が概観されなければなりません。なぜならば、その領野はわれわれ自身の中にあり、経験からはどんな開明も期待されえぬからです。このことをあなたはご存知です。ところで、その領野の全範囲、その領野の区分、限界〔外枠〕、全内容を確實

な原理に従って記述し、そして将来われわれが理性の地盤にあるのか、それとも詭弁的推理の地盤にあるのかどうかを確実に知りうるように境界石を置いたりするためには、純粹理性の批判 *eine Kritik*、訓練 *eine Disziplin*、規準 *ein Canon* および建築術 *eine Architektonik* が、つまり形式の完備した学問が必要であり、その学問のためには、すでに現存するようなものは何一つ使用できず、そしてその学問を基礎づけるためには、まったく独自の技術的表現 *ganz eigene technische Ausdrücke* が必要となるのです。(XI98-9)<sup>(1)</sup>

われわれはここに、「建築術 *Architektonik*」という術語の批判的用法の、おそらくは最初の事例を見いだすことができる。しかし、たんにそればかりでなく、そもそもこの沈黙期のカントの「体系的」な思索の営みそのものが、「純粹理性」の全領野を「概観」する「形式の完備した学問」の「基礎づけ *Grundlegung*」を企図し、建築術的に営まれたものであったことを推察することができる。じつさい、その沈黙の初期、一七七一年六月七日付けのヘルツ宛の書簡においてもすでに、カントは「感性和理性との限界」の名のもとに、批判哲学全体の建築構想を宣言していたのであった。

自然の技術としての建築術——カントの体系思想

感性だけではなく悟性という人間の精神力の主観的原理に基づくものを、対象に直接に関係するものから区別することにおける確実で判明な洞察が、哲学全体において、いやそれどころか人間の最も重要な目的一般に対して、どんなに大きな影響をもつものか、あなたはご承知のはずです。体系中毒 *Systemensucht* に心を奪われることがないならば、たとえそれがどんなに広範な適用範囲をもっているとしても、同一の根本的規則に関してくわえられる諸研究は、たがいに立証しあうはずです。ですから私は今、感性和理性との限界という題目の下で、感性界のために規定された根本概念ならびに法則の関係と、趣味論、形而上学および道德の本性をなすものの輪郭 *Entwurf*〔見取り図〕とをあわせ含むべき著作を、いささか詳細に仕上げることに没頭しています。(XI22-3)

ここに「建築術」という語句は見られない。しかし、時代に流行する「体系中毒」からは厳しく距離をとりながらも、自らの理性批判の研究を体系的に建築してゆこうとする強い意気込みは如実にうかがわれる。建築術的な含意を濃厚にもつ「輪郭〔見取り図〕」の語に注目したい。

カントの理性批判の哲学は、その最初の建立の時点（一七八一年）に先立つ長い沈黙期をとおして、当初から建築

術的に構想され、次第に練り上げられていった。しかもその沈黙考の成果として発表された第一批判は、それ自体でまた、来るべき本来的な形而上学の体系建築のための設計図である。この二重の意味で建築術的な理性批判の哲学は、つねに実際の本格的な（形而上学の）建設施工に先立つ設計図として、いまだかつて固定した・確定的なものではない。たしかに、建築術的に生成した批判哲学は、それ自身すでに一つの体系である。<sup>(12)</sup>否、そもそも理性批判は、〈形而上学の体系〉の建築の予備学として、それ自身、建築術的に構想され、一個の体系を形成するものでなければならぬ。しかし、批判の体系はいつて固定的・確定的なものではない。むしろ、認知された環境世界の變動に呼応して変異的な形成を繰り返す生物有機体にも似て、<sup>(13)</sup>カントの批判哲学の体系構想は、世界（経験的可感界と可想界）と自己（純粹理性）との反省的対話を<sup>(14)</sup>つうじて逐次改良をほどこされ、批判期をつうじての批判的思考と建築術的体系思想との練磨の過程で、基本設計の根本的な変更の可能性も検討されながら、<sup>(15)</sup>より厳しく整備彫琢されていった。

学の体系的完全性を誇示し、完成された体系の出来を競いあう当代流行の「体系中毒」からは一線を画して、カントの哲学的建築術は、実際の建築施工に先立つ設計と基礎づけの準備作業に力点をおき、そこで批判的思考の本領を

發揮している。しかもそれは、現代の懷疑的相對主義的な思潮のごとく体系的なもの全般を徹底的に忌避し、既存の体系にたいしてひたすら否定的破壊的のみにふるまうのではなく、あくまでも本来的な体系建築（形而上学体系の再構築 *Rekonstruktion*）を企図する批判的思考の営みとして、破壊的にして同時に建設的である。そもそもカントは、人間が哲学すること *Philosophieren* の途上の性格を強調してもいた。カントの建築術の思想は、こうした批判的建築設計の思索 *Denken* のダイナミズムにおいて理解されなければならない。

### 三、神の世界建築——建築術の思想の来歴

ところで、学問体系論と建築術概念とのつながりという点に関していえば、これは何もカントにかぎった事態ではなく、彼に先立つドイツ啓蒙期の思想家たちにも広く認められる着想であった。そもそもこの時代を代表するクリスティアン・ヴォルフが、第一哲学としての存在論を「建築術的な学 *scientia architectonica*」と呼んでおり、それをバウムガルテンが継承し、その延長線上でランベルトが『建築術の設計構想』（*Anlage zur Architectonik*, 1771）を著した。カントの建築術的体系論は、とりわけランベル



トとの密接な思想的交渉のもと、明らかにこの一連の流れのなかにある。<sup>(17)</sup>

そして、これはとくにランベルトにおいて明瞭に見てとれることであるが、この一連の建築術的学問論の背景には、その共通前提として、世界建築家としての神と、その作品としての世界建築物という、きわめて長い歴史をもつ思想伝統があった。とりわけ、世界を神の建築術によって創造された被造物とみなす中世キリスト教思想を母胎として、近世では、ライプニッツが神を世界全体の建築家と見なし、<sup>(19)</sup>この思想は広く十八世紀の自然神学 Physikotheologie の共有財産でもあったが、その淵源をさぐれば、古くはプラトン『ティマイオス』のデミウルゴス（世界建築の工匠としての神）に遡ることができるし、そこに顕著なへ多様の統一という秩序・調和の思想モチーフに着目するならば、その源泉はさらに西洋哲学の始元に、すなわち存在一般、在るもの全体、万物（パンタ）としての世界をコスモスと見た「自然について（ペリ・ピュセオース）」の一連の思索のうちに求めることができるだろう。<sup>(20)</sup>

整然たる秩序を原義とする「コスモス」としての世界、そして、この見事な世界建築物を建立する建築家としての一なる神。この思想伝統を背景にしたとき、「存在するもの *δύ, ens, Ding*」を「一般的 *καθόλου, in genere,*

*überhaupt*」に考察する「存在論 *ontologia, Ontologie*」（一般形而上学）が「建築術的な学」となることは、きわめて見やすい道理である。そもそも「オントロギア」という学問名自体が、アリストテレス以来の第一哲学の考察様式をふまえて、ヴォルフにより命名されたものでもあった。カントの『純粹理性批判』は、そうした存在論を「超越論的分析論」で、さらに魂・世界・神にかんする特殊形而上学を「超越論的弁証論」で、厳しい理性批判の徹底的な吟味にかけたものであり、それゆえにまたそれ自身も建築術的であらねばならなかった。存在論、そして形而上学全体は、いわば神の世界建築の人間の認識的なミメーシスとして、建築術的な体系をなすはずであるし、また、なすべきなのである。

問題はその建築術の質である。さしあたっての見通しをのべれば、カントの超越論的哲学とヴォルフらの学校哲学の存在論とを分けるものは、あの建築術のミメーシスの認識論的な批判的自覚の有無にあるのだといってよい。その自覚は同時に、至高の知性としての神に対する人間理性の有限性の自覚でもあり、理性能力の限界を画定する批判の必要性の自覚でもあった。カントは、この徹底的な自覚のもとに「世界概念にしたがった哲学 *Philosophie nach dem Weltbegriff*」の新たな建築を企図する。あるいはそれは、

世界の概念把握を「求める nach」有限理性の、不断の哲学の営みであるというべきかもしれない。<sup>(21)</sup>しかし、この件についてはあらためて論じることにして、さしあたり次節以降では、カントの哲学的キャリアの初期から認められる、自然神学的な世界建築の思想の内実を、目を凝らすことにしよう。批判以前から批判期にいたるカントの建築術思想の変遷を概観することによってこそ、そこに一貫して保持されるものと、批判的に大きく変容するものとを見分け、カントの批判的建築術の特質を見きわめることができるように思われるからである。

#### 四、若いカントの世界建築の思想(1)——建築家としての神

一七五五年、カント三十一歳のときの著作『天界の一般自然史と理論』には、いかなる権威にも怖じない青年の客気に燃えた前批判期の宇宙論と、その世界建築の思想とが力強く打ち出されている。たしかに本書には、ギリシア語起源の「建築家 *Architekt*」および「建築術 *Architektonik*」の語は出現しない。しかし、カントは「体系」ないし「体系的」の語を随所で使用しており、<sup>(22)</sup>太陽系をはじめとする惑星系から、それを包括する恒星系（たとえば銀河系）、さらに数々の恒星系をも包括する全宇宙体系へと壮大に展

開する世界の「体系的体制 *eine systematische Verfassung*」(vgl. bes. I 246)にかんして、「世界建築 *Weltbau*」ないし「世界建築物 *Weltgebäude*」という呼称を常用している。<sup>(23)</sup>

もしわれわれがこれら恒星系をまたもや全自然の巨大な連鎖の項とみなすなら、以前とまったく同じ理由によって、これらは互いに関連し結合していると考えることができる。これらの恒星系は、全自然をつらぬく最初の形成法則によってはるかに巨大な新しい体系を構成し、以前のどの引力よりも比較にならぬほど強い引力をもった物体がこの体系の中心点となり、その引力によって体系の項の規則的な位置を決定するだろう。……しかし、この体系的設備 *die systematische Einrichtungen* の最後はそもそも最終的にどうなるのだろうか。創造そのものはどこで終わるのだろうか。創造が無限の存在者の力と関係していると考えるなら、創造に限界のあるはずがない。永遠性ですら、それがもし無限の空間と結びつかないのなら、最高存在者の証拠を理解するのに十分ではない。神の性質を啓示する領野は、この性質そのものと同様に無限である。……まことに、形成、形式、美、完全性は、世界建築の素材となる基本諸要素ならびに諸実

体の連関である。そしてこのことは、神の知恵が常に配慮しつづける諸施設 *Anstalten* において認められる。そしてこれもまた神の知恵に最もふさわしいことだが、こうした諸施設は、これら諸実体に植え付けられた普遍的法則から、強制をとみなわぬ継起をつうじて展開してくるのである。したがって、世界建築物の秩序と設備とが、創造された自然素材の宝庫から時間とともに徐々に生じるのだと考えても、それは十分な根拠に基づいてのことである。しかしながら、あらゆる変化の根底には根本物質の性質と力が横たわっており、その根本物質そのものは、神の現実存在からの直接的な帰結なのである。

(I 309-10)

ここに明らかに見られるように、世界建築の究極の主体は、創造と摂理の神である。のちのカントの理性批判は、神の存在論的、宇宙論的〔世界論的〕、そしてまた自然神学的な存在証明の理論的不備を指摘し、世界の空間的な果て、時間的な始めと終りの有無についての判断を停止するように勧告するのだが、そうした批判の慎重な姿勢とはうってかわって、若いカントは、自然神学の神証明の威力を確信しつつ、神の無限の力にふさわしい創造の永遠性、世界空間の無限性を主張する。<sup>24</sup>

自然の技術としての建築術——カントの体系思想

ここにわれわれが述べてきた学説によって、われわれには、創造の無限の領野への展望が開かれ、神というこの偉大な工作主任 *der große Werkmeister* の無限性に適ったしかたで、神の作品を表象することができる。巨大な惑星宇宙のなかでは、地球など一粒の砂にすぎず、ほとんど目にもとまらない。この巨大さだけでも知性を驚嘆させるのであつてみれば、銀河のすべてを満たす無数の宇宙と体系とに目を向けるとき、われわれは、どれほどの驚嘆をもつて歓喜にひたることだろうか。(I 255-6)

この手放しの讃嘆において、神は世界建築の「偉大な工作主任」であり、この文脈で「工作主任〔巨匠・芸術家〕」は「建築家」と同義である。というよりも、「アルケー〔始元、原理〕」と「テクトーン〔大工、工作者〕」からなるギリシア語「アルキテクトーン」が、「建築家」である以前に「主任技術者」としての「棟梁」だったことをふまえるならば、ここでカントの用いる *Werkmeister* の語は、「アルキテクトーン」の直訳なのだともいえる。<sup>25</sup>

ところで、この世界建築術のメタファーの理解にさいしては、十分に慎重でなければならない。その建築主体が神であるというとき、さしあたりまず、その設計プランがひ

とえに神によるものである点に疑いはない。カントも、摂理の思想にしたがって、神の「最高の知恵の企図 *der Entwurf einer höchsten Weisheit*」(I 225)、「完全性の計画 *Plan der Vollkommenheit*」(I 228)、「最高に知恵深き意図 *eine höchst weise Absicht*」(*ibid.*)について語っている。

世界建築物を目にするとき、その設備のうちなるこの上なく卓越した配置と、その諸関係の完全性のうちなる神の手の確かなメルクマルとに、気づかぬわけにはゆかない。理性は、これほどの美とこれほどの卓越性と思いを寄せ驚嘆したあとでは、これらすべてを偶然と僥倖とに帰することもあえて辞さない厚顔の愚行に、当然のごとく憤激する。これらすべてはあの最高の知恵が企図し、一なる無限の力が自ら実行したものにちがいない。さもなければ、一つの目的のうちに集約するこれほどの数の意図が、この世界建築物の体制のうちに見いだされるというのは、不可能なはずである。(I 331-2)

信仰の確信と知的感情の高揚と一つになった「理性」は、ここでへ多様の統一という伝統思想のモチーフをみごとに描き出しながら、世界建築にかんする神の「企図」にく

わえて、「実行 *ausführen*」についても語っている。世界建築物は、摂理と創造の「神の手」による壮麗なる「作品 *Werk*」であり、その設計と施工の主体は、明らかに神である。<sup>26</sup>ただし、その施工(今日、一般に「建設」ともいわれる)の態様には、特筆すべき特徴がある。カントはつづけて、きわめて重要かつ興味深い問いを立てている。

ここでさらに問題となるのは、ただ次の点だけである。最高の悟性によって計画された宇宙の設備の企図は、永遠なる諸自然本性の本質的諸規定のうちにすでに据えつけられ、普遍的な運動諸法則のうちに植え付けられているのであり、その企図がそれらから、最も完全な秩序にふさわしい仕方、強制されずに *ungezwungen* 自己展開したものであるのか、それとも……(I 332)

世界建築の施工においては、神の設計プランの実行に「諸自然本性 *Naturen*」が参与する。一般に建築の施工の直接的な作業には、建築家(棟梁)の指揮のもと、大工、左官、建具師など、多種多様な職人が動員されるのであるから、ここで神ならざるものが施工に参与するとされている点は、さして特異なことではない。注目すべきは、その参与者が自然であり、とりわけ物の内なる自然だということ

である。しかも、その内的、自然本性の「本質的、wesentlich」な諸規定の「内に」、建築の設計プランがもともと「植え付けられて *gepflanzt*」いるという仕方、幾重にも強調されている、世界建築術の徹底的に内的な性格である。

通常、建築術は、人間的技術一般の例にもれず、建築資材（素材・質料）の存在を前提し、作品（ないし素材）の外なる建築家が設計したプランにしたがって、数々の職人の技術を動員しつつ、素材の外から、これに一定のかたち（形相）を与えるという仕方、働きかける。しかし、神の世界建築の場合、世界を無から創造する神の絶対的超越性にもかかわらず（あるいはむしろそれゆえに）、建築術は素材の自然本性の内にあって、作品をそれ自身の内から、自己展開 *sich entwickeln* という仕方、形成する。

カオスから、みずからおのずと *von selber* 完全な世界体制を形成する隠れた技術 *eine geheime Kunst* を、神は自然力のなかに付与した。（I229）

自然の事物のうちで、物の自然本性として隠れた仕方ではたらく神の匠の技としての建築術。ここにわれわれは、神の原型的な建築術が、いわば自然な技術としてはたらくものであることを、容易に確認することができる。古代・中

世以来の〈本質形相〉の目的論的思想伝統に、いまだ前批判的・無批判的に依拠して語りだされた若いカントの世界建築術の思想こそが、のちに「自然の技術 *Technik der Natur*」の批判的概念となるものの母胎なのではあるまいか。

##### 五、若いカントの世界建築の思想(2)——自由な自然の建築術

神の世界建築術は、本質的に「自然なしかたで *natürlich, naturaliter*」はたらく。その超人的な技術は、人為技術を越えた自然である。神の創造のわざは、物の自然を自然たらしめるものとして、いわば〈原—自然 *Ur-Natur*〉であり、これを始元（アルケー）とする世界の全自然の自己展開は、同時に神の摂理と創造の自己展開である。

創造は、一瞬の仕事 *das Werk von einem Augenblicke* ではない。創造は、無限の諸実体と諸物体の産出とともに始まり、その後もつねに豊穡の度合いを増しながら、無限の経過全体をとおしてはたらく *wirksam ist*。……形成された自然の領域は、全総体の無限に小さな部分にすぎない。そしてその全総体は、未来の諸世界の種子 *Samen* を含み、所要時間に長短の差はあれ、

カオスの粗野な状態から脱却しようと努めているのである。創造は決して完成することはない。むしろ創造はかつて始まった。しかしけつして終わることはないだろう。創造はつねにはたらし、より多くの自然を登場させ、新しい物や新しい世界を産出しつづける。創造がもたらす作品は、創造が適用される時間に関係する。無数の果てしない世界によって無限空間の無制限な範囲全体を生気づけるために、創造はまさに永遠性しか必要としない。(I 314)

人間文化の歴史と同じく、自然にも歴史の時間的な展開がある。そしてカントの「天界の自然史 *Naturschichte*」は、世界創造の永遠の歴史における神と自然との「協働 *Mitwirkung*」のやまを語り出そうとする。この世界建築の施工において、設計者たる神は同時に、施工の空間的・時間的な無限の広がり全体を、一手に取り仕切り体系的に組織する現場監督であり、まさにこの両面の意味でアルキテクトーン、すなわち第一の、統率的、統制的、棟梁的な技術者である。しかも神はあらゆる「自然力」に、世界体系の建築のための「隠れた技術」を賦与することにより、施工の実際の作業を、全面的に物の内なる自然の手に委ねる。神と自然はここで一体となつてはたらし、それゆえに、

世界建築の施工の主体は、神であるとともに自然でもある。世界建築の施工にかんして、自然は神の創造の協働主体である。このように言うとき、私の念頭にあるものは、形成的な自然の自由である。すでに引用した数個の文からも読み取れるように、若いカントは、自然的世界の歴史的・時間的な展開における自然の自由を語り出すために、自然の建築術的世界形成が、自然の自己展開として、自然それ自身から、みずからおのずと *von selber* (I 223, 227, 229) まったく自然に *ganz natürlich* (I 227) 進行するものであることを、再三にわたって語っている。もちろん、「万物の原材料である物質は一定の法則に拘束されており」(I 228)、諸物質はこの法則に従って「必然的に美しい諸結合を産出せざるをえない」(*ibid.*)。つまり「物質には、この完全性の計画から逃れる自由などない」(*ibid.*)のだが、しかしそのとき諸物質は、「この諸法則に自主的に身を委ねている *frei überlassen*」(*ibid.*)のであって、それというのも、それらの自然法則は、物質それ自身の自然本性として、神によって始めから、物質そのものの内に植え付けられたものだからである。<sup>27)</sup>

自然の物質は、普遍的自然諸法則をつうじて、神の「最高に知恵深き意図に服している」(*ibid.*)。しかしそれはけつして「ある種の強制 *Zwang* による」(I 333) 抑圧的な

服従ではない。むしろそれは自由な服従であり、それゆえにまた、世界のみごとな「諸施設は、これら諸実体に植え付けられた普遍的法則から、強制をとみなわぬ継起をつうじて展開してくる」(I 310, vgl. 332)と言われるのである。

世界建築の協働施工において、自由な自然は、建築術の棟梁としての神に自主的に服従し、そのことによって、みずからおのずと、自然に、かつ自由に自己形成する。この内的根源的自然の自由には、自然の普遍的法則との関係において、批判期のへ人間理性の自律の自由と同型的なものが認められる<sup>(28)</sup>。しかし、そのことはさしあたり脇におき、ここではただ、自然の自己展開の自由が、神の強制からの自由として語られている点に注目しておきたい<sup>(29)</sup>。

かつてカウルバッハは、批判期カントの哲学が語りだす「自然」の基本的二義、すなわち、自然科学と近代技術によって形式的に見られた自然 *natura formaliter spectata* と、その都度の具体的な経験によって質料的に見られた自然 *natura materialiter spectata* との区別を、「枷をはめられた「拘束された」自然 *gefesselte Natur*」と「自由な自然 *freie Natur*」とのパースペクティヴの相違として、きわめて印象深く浮き彫りにした。カウルバッハが的確に指摘したように、カントの第一批判がえがく形式的自然の束縛の枷となるものは、人間悟性のアприオリな認識形式

(とりわけ機械論的な普遍的自然法則) である。自然はここで、いわば「頭初から」自由を奪われている。そして、このアприオリな認識形式の普遍的な拘束をとおして、科学的認識と技術的实践とによる自然への人為的・機械的な「強制」の全般的な可能性が開かれるのである<sup>(30)</sup>。

これにたいして、若いカントの『天界論』では、自然にたいする人間悟性のアприオリな束縛・強制のはるか以前のところで、そしてまた現象と物自体との批判的区別のはるか手前のところで、神の強制からの自然の自由が問題にされている。いや、もっと正確にいえば、あの世界建築術の協働作業における自然の自由が、全知全能ゆえの神の非強制的な促しへの自主的な応答として語られている。すなわち、自然はここで、あらかじめすであつた神の強制から自由になるのではなく、そもそも強制的なるもの一切を必要とせぬ神の最高の知恵のゆえに、始めから自由なるものとして創造されているのである。

ところで、物の順序からするならば、人間の選択意思 *Willkür* の自由ばかりでなく、批判哲学の要の石となる理性の自律の自由さえもが、このような自然の根源的自由を母胎とし、自由な自然の自己展開として形成される世界体系の地盤のうえに、初めて可能になるのである。すなわち、人間のあらゆる自由の根底には、自然の自由がなければ

ばならない。若いカントはおそらく、こうした存在の秩序の形而上学を確信していた。理性批判は、何よりもカント自身のこうした独断的確信を打破したのであるが、とはいへ「自由な自然」というカント哲学のライトモチーフそのものは、批判をへたうえでお（いわば一つの批判的解釈学的パースペクティブとして）強固に保持されてゆく。そしてこのモチーフは、先行する二つの批判では折りにふれて語られ、『判断力批判』では、「自然の技術」という反省的判断力の統制原理として、批判的に権限付与（正当化）されて、自然哲学のみならず、いわゆる歴史哲学から法と政治の哲学にいたるまで、およそ世界知としての哲学の全般にわたって、全面的に語り出されることになる。

第一批判から第三批判へという思索と叙述の進行からの印象では、第三批判の自然哲学は、機械論的認識原理によるアプリオリで全般的な抑圧からの事後的局所的な「自然の解放」を隠れた主題としているのだと見えなくもない。しかし、第三批判の「自然の技術」が、若いカントの「自由な自然」のモチーフの批判的な取り戻し *Wiederholung* であるとするならば、カテゴリーの強制からの解放と見えなものは、じつはその強制以前の思索の場所への、批判的反省的な立ち返りであるといったほうがよいのかもしれない。

## 六、若いカントの世界建築の思想(3)——生ける自然の有機的建築術

話を『天界論』にもどそう。カントは本書各部の表題を、彼の愛したポープの詩句のエピグラフで飾り、その第二部の扉には、すべてを結びつける「愛の連鎖 the chain of love」としての「われわれの世界」の生成を謳う一節を掲げている。<sup>31</sup>

見よ、形成する自然が、その大いなる目的に向かって運動する。

陽光中に漂う塵埃はどれも他の塵埃に向かって活動し、どの塵埃も互いに他に引きつけられつつ、他の塵埃を自分引きつけ、

最も近い塵埃を包み込み、形成しようと努力している。

見よ、物質たちが千通りの多様な仕方

普遍的中心に向けて突き進む。(I 259)

こうしたポープの扱いからも察せられるように、若いカントの「自由な自然」、そしてその批判的反復である「自然の技術」が、あの「能産的自然 *natura naturans*」の思想の流れに倅さすものであり、古代ギリシア以来の目的論



的自然観の伝統に与するものであることは明らかである。<sup>32)</sup>

このような思想背景は、あらためてカント初期自然哲学における目的論と機械論との関係についての考察を要求しているが、ここでは立ち入らず、ただ、若いカントの目的論的自然観に明瞭に見られる生命の論点にのみ注目しておきたい。というのも、ニュートン力学の原理の徹底をうたう『天界論』のカントの叙述は、ヘカントによる近代の機械論的自然科学の基礎づけ<sup>33)</sup>という一般的・教科書的な先入観を見事に裏切るしかたで、古代ギリシアの物活論（そしてまた二〇世紀初頭の新生気論）と似かよった印象を与えるものになっているからである。

私は以下のように想定する。われわれの太陽系に属する諸球体や、すべての惑星、彗星をつくっている一切の物質は、万物の始めにおいては、その元素的な根本素材に解体しており、世界建築物の全空間を満たしていたが、今日ではこれらの形成された諸天体がそこで回転運動している。∴直接的に創造されたばかりの自然は、ありうるかぎりの粗野な状態になっていて、未形成のままであつた。けれども、このようなカオスをなしている諸元素の本質的な特性のうちにも、それら元素の本質が神の悟性の永遠なる理念からの帰結である以上は、その起源

以来有している完全性の徴表がうかがえるのである。意図もなく企図されたように見える最も単純で最も普遍的な諸性質、単に受動的であり、形式や配備を必要とするように見える物質、それは最も単純な状態にありながら、自然的な展開によつて、一つのよりいっそう完全な体制へと自己を形成しようとする努力を持つていたのである。∴／このような仕方でも満たされた空間においては、普遍的静止はただ一瞬間持続するにすぎない。諸元素は、相互に運動へと差し向ける本質的な力をもっており、それら自身が生命の源泉である。物質はただちに自己形成の努力のうちにある。∴／このように自己形成する自然を、カオスの空間全体にわたって追跡していけば、この作用のすべての結果が、結局は種々の物塊の合成にいたり、そしてその形成の成就されたのちには、この物塊が引力の平衡によつて静止し、永久に不動となるであろうことを、容易に知るのである。／けれども自然はなお別種の力〔斥力〕を蔵している。それは物質が微粒子に解体したときに特に現れるもので、この力によつて微粒子は相互に反発しあい、引力との抗争によつて、いわば自然の永続的生命をなすような運動を生ずるのである。〔263-4〕

若いカントの「自己形成する自然 sich bildende Natur」において、物質 *die Materie* な「元素 *die Elemente*」は、神的悟性の世界建築の理念に即した「自己形成の努力」を本質とする。<sup>33</sup>「努力 *Bestrebung*」とは伝統的術語では「コナートゥス *conatus*」であり、自然の自己形成は、物の内なる潜在的な本質形相の自己展開を意味している。しかも、その自己形成ないし自己展開は、しばしば生命体（とりわけ植物）の成長のイメージに即して語られる。たとえば、「この物体はいわば無限に小さな萌芽 *ein unendlich kleiner Keime* から急速に成長 *fortwachsen* する」（I 265）、と。神の世界建築の営みに参与するカントの「自由な自然」の根底には、古代・中世以来の伝統的な「生ける自然」の思想、すなわち、生成や産みの母胎でもあるピュシスやナトゥーラの思想の息吹が脈打っている。ただしここで物質は、素朴な物活論が語るように、当初から生命をもって自ら運動する、というわけではない。元素は自発的に動くのではない。しかし、いずれの元素も他を引きつける「本質的な力」をそなえており、あのポープも語っていたように、他の諸元素と互いに「引力」を作動しあうことによって、あまたの物質が一致協力して世界建築の体系形成の運動を開始するのである。それゆえ、いわゆる「神の一撃」は不要である。<sup>34</sup>世界建築の施工は、「神

の直接の手」を煩わすことなく、「自然の手」（I 337）によって開始され、執り行われる。<sup>34</sup>そして自然の諸元素は、相互の引力によって運動を開始するかぎりにおいて、「それら自身が生命の源泉 *eine Quelle des Lebens* である」。しかも物質の引力には、これとは「別種の力」である斥力が対抗しており、この両種の力の対抗関係（アンタゴニズムス！）のおかげで、世界建築の自己形成の運動は永遠に「引力の平衡」（そしておそらくは熱力学的平衡）の総体的な死を迎えることなく、「自然の永続的生命をなすような運動」を展開することになるのである。カントは言う。「世界空間は無数の世界によって、際限なく *ohne Ende*、生氣づけられる *belebt* ことになるだろう」（I 310）。「創造がもたらす作品は、創造が適用される時間に関係する。無数の果てしない世界によって無限空間の無際限な範囲全体を生氣づけるために、創造はまさに永遠性しか必要としない」（I 314）。そして「灰からふたたびよみがえるためにのみおのれを焼き尽くす、この自然という不死鳥を、無限の時間と空間のすべてにわたって追跡するならば、これらすべてに思いをはせる精神は深い驚きをおぼえるだろう」（I 321）、と。

現代の生態学と宇宙遊泳の実体験とから着想されたラヴロックの「ガイア」は、地球生命圏ないし地球生態系を美

しく表象するものであるが、この現代的な世界生命の表象よりもはるかに壮大なしかたで、若いカントは、無限宇宙の永遠なる生命の、生成消滅の「はてしない物語」を物語る。この『天界論』において、無限宇宙の物質運動の「生命」と、いわゆる生物の有機的生命とはいわば地続きであり、カントはこれらをつなぐものとして、他に動かされるのではなく自ら動こうとする諸天体の内的な「躍動力 Schwungskräfte」<sup>(35)</sup>を語り、あるいはさらに「光と生命との源泉」(I 362)としての「太陽」、すなわち「燃える火」として「いわば自分自身から活動し aus sich selbst wirksam」(I 324-5)、中心点たる自分の場所から「すべてを生気づける熱」(I 355)を放射することによって、「距離にに応じてこれ「物質」を生気づけ、これを生命的な経営組織の諸活動 Verrichtungen der animalischen Ökonomie をおこなう能力のあるものにする」(I 358)もろもろの太陽、そして「この世界建築物全体にとって……光と生命の中心点となっている太陽」(I 327)について語っている。

こうした生命の自然哲学を基盤にして、若いカントは、生ける自然の世界建築術を物語るのである。神による建築設計と全素材の提供、そして素材本性をつうじた施工面の全権委任とをうけて、しかもつねに棟梁たる神の指揮監督の統制のもと、自然が自主的に自己展開する自由な世界建

築の技術は、自然の生命の技術なのであった。しかもここで、あらゆる「生命の源泉」たる原物質ないし諸元素の世界形成の営みは、動物的生命の自発的身体運動のイメージではなく、むしろ植物をもふくむ全生命体の、身体形成に関わる有機的生命のイメージのもとに語りだされている。<sup>(36)</sup>ブルノー・タウトは、その名も『宇宙建築家』と題する一九一九年の著作で、勢いよく萌えいで生長する植物としての「クリスタルハウス」のメタフォリカルなスケッチを提案した。<sup>(37)</sup>世界建築物の表層的な形が植物や動物の身体形態に相似のものであるかどうかはともかくとして、少なくともカントの世界建築術の思想において、生物有機体論の視点(ないし光学 Optik)が本質的性格をなすものであること、それゆえにまた、批判期にも認められる建築物と有機体とのアナロジーが、単なる比喩にとどまらぬ建築術思想の核心なのであるということを、われわれは以上から確認できる。

そしてまた、このような若いカントの建築術思想は、物の素材(木材・土・石・鉄などの質料)を見つめ、個々の自然素材の本性(いのち・味)を尊重して、これに無心に耳を傾け、その自然本性の趣きに即して作品を造形しよう<sup>(38)</sup>と心がける匠の技、たとえば日本古来の職人の手仕事や、陶芸、生け花、茶の湯、懷石料理などの藝術行為、あるいは

は洋の東西を問わぬ発酵の技法による食品（パン、ワイン、味噌・醤油など）の獲得法といった事柄への連想を強くかきたてる。物の自然を知悉しつつ、しかもこれを恣意的・利己的に操作するのではなく、むしろそのような人為的な「計らい」は減却して、ただひたすら物の自然と対話しつつ、これに随順し、すべてをこれに委ねる技術。そうした自然な人為技術（いわば放下の技術）は、現代技術文明においてなお、しかもその隠れ家的、避難所的な局所で例外的ではなく、まさに技術文明全体のあるべき方向を示す批判的指導理念の本領として、実現可能だろうか。それが可能かどうかは別にして、すくなくともそのような自然的技術の精神を取り戻そうとする悪戦苦闘の跡は、モダニズム以後を意識し、さらにポストモダンの超克をもめざした多くの藝術活動の内に認めることができるように思う。かくしてカントの建築術の思想は、伝統的かつ現代的な技術（テクネー、アルス、クンスト、アート）の自然な響きを、通奏低音として奏でているのである。

## 七、批判以後の『天界論』の再刊をめぐって

生ける自然の目的論、多様の統一、一なる神の世界創造といったヨーロッパ自然哲学の主旋律に合わせて、カント

の世界建築の思想は、その主題（テーマ、モチーフ）の十八世紀的、ドイツ啓蒙的、カント的な変奏であり、若き日の『天界論』は、ニュートン力学の原理の徹底による宇宙生成論という近代的な装いのもとに、その変奏主題を高らかに奏でたものであった。この変奏の生命の源はカントの神信仰にあり、『天界論』以後も、自然神学的な神の存在論証が話題となるところでは、その旋律は必ず強調、反復される。批判期も例外ではない。もちろん、あの世界建築術の旋律は批判の響きに合わせてさらなる変奏を余儀なくされており、しかも理性批判の革命的な主題にかき消されがちではある。しかし、それでもじっと耳を澄ませば、第一、第二批判の通奏低音として鳴り響いているし、その旋律はおりにふれて（たとえば超越論的理想の章において）、思い出したようにテクニクの表面に噴出する。そして、批判の主題演奏の背後で批判的変奏のかたちを念入りに整え、第三批判でいよいよ前面に押し出される。「自然の技術」というこの書のライトモチーフとして。

自然の技術という概念は、『判断力批判』研究において、おりにふれて話題に上りながらも、主題的に論じられることは少なかった。しかも、その第三批判研究そのものが、カント批判哲学研究の傍流に位置づけられてきた。しかし、私の見るところ、自然の技術こそが『判断力批判』の思想

の核心であり、また『判断力批判』こそがカント批判哲学体系の基軸である。自然の技術と、それを長らく育んできた世界建築術の思想とは、いわば「カント哲学の隠れた主題」である。しかも、たんに自然哲学のみならず、歴史、法、政治、教育等を包括する広義の実践哲学をも含めた、カント哲学構想全体の隠れた主題であり、さらにこの旋律は、実は、カントの哲学体系の学的建築術としても反復、変奏されている。しかしこれはまだおぼろげな見通しにすぎない。こうしたカント解釈の全体構想のもと、われわれは細部の詰めを急がなければならない。まずは、世界建築の思想の、批判による変奏の実態を探ることにしよう。

これについては、四、五、六節でもおりにふれて（世界の無限性・永遠性の論点などに関して）指摘してきたが、いま何よりも注目しなければならないのは、理性批判の徹底による物質および生命の概念の変容ぶりであろう。物質の内的生命の本質力による、その自由な自己展開としての世界の体系的形成という壮大な物語りが、若いカントの建築思想の醍醐味であり魅力でもあったのだが、これがいま根本から揺さぶられようとしている。

すでに別の機会に確認したように、<sup>38</sup>批判期のカントは一方で、機械的・力学的な「物質」概念の本質を「慣性」の原理に見いだし、「外的原因」がなければいかなる変化も

しめさぬ物質の「無生命性」を語って、批判以前には物質に認めていた「表象」や「欲求」といった内的意識的なもの（そして伝統的な「実体形相」の概念に連なる内的本質的なもの）を、批判的物質概念からは厳しく排除した（vgl. IV 544）。他方でカントは、「生命」をわれわれ人間の内的経験の内省によって把握する地点から出発して、この語の用法を、意識的に身体運動する動物的な生命のレベル以上に限定し、「有機的」身体形成と意識的「生命」とを概念的に切り離して、第三批判第二部の有機体の分析でも、あえて「生命」の語の使用を極力避けるという慎重な姿勢を堅持した。ここに自然の様相は一変する。かつて自由で生き生きとした自然が語られていた表舞台には、機械論的な原因—結果のカテゴリーにアприオリに縛られた合法的な自然が踊り出て、若い日のカントの世界建築の思想は、批判哲学の前景からは姿を消すことになる。しかしこれはあくまでも、カントが批判という理性の自己認識の難業と、それに依拠した形而上学の新たな体系建築の準備作業とに全力を傾注したことを意味するのであって、彼があの世界建築術の思想を全面的に破棄したことを意味するのではない。

さしあたりの傍証として、当該『天界論』の出版の顛末を確認しておこう。一七五五年春にプロイセン国王フリー

ドリヒへの匿名の献辞を添えて印刷されたカントの『天界の一般自然史と理論』は、出版社の倒産と全財産の差し押さえという憂き目にあい、いくつかの書評や広告で取り上げられはしたものの、広く市場に出まわることなく、ごく一部の者に知られるのみに終わった。その後一七六一年にあのランベルトが、カントのものと理論内容の酷似する『世界建築の設備に関する宇宙論的書簡』を刊行する。これを受けてカントは、自説の先取権を主張する思惑もあつてのことだろう、『神の存在論証のための唯一可能な証明根拠』<sup>(39)</sup>（一七六三年）を著すさいに、その第二部第七考察を「宇宙〔世界〕生成論 *Kosmogonie*」と題し、八年前の『天界論』の要約・紹介に充てた。しかしその後も、あの『天界論』そのものは長らく再刊されぬまま放置される。そして一七九一年、ほかならぬ理性批判の完結を告げる『判断力批判』刊行の翌年に、『天界論』の抜粋版が公刊される。これは、カントの依頼と校閲のもとに弟子ゲンジヒエ（Johann Friedrich Gensichen, 1759-1807）<sup>(40)</sup>が作成し、ハーシエルの『天界の建築構造について』の独訳版（*Über den Bau des Himmels*）の付録として出版されたものだが、これを皮切りに『天界の一般自然史と理論』そのものも、カントの生前には一七九七年から一七九九年にかけて、複数の版が立て続けに公刊されるにいたる。

こうしたカント晩年の『天界論』刊行の事実は何を意味するのか。さまざまな詮索が可能だろう。反射望遠鏡の観測に基づくハーシエルの実証的な学説に続いて、一七九六年にはラプラスの『宇宙体系論』（*Exposition du système du monde*）も現われ、時代の天文学研究の進展を背景に、カント『天界論』の再刊は時宜にかなったものでもあったし、批判哲学の老大家の若い日の記録として、読者の需要もあつただろう。こうした外的事情に加えて、カント自身には明らかに、ますます信頼性の高まった天文学説の先取権を確保するという内的な理由もあった。

さしあたり、本書再刊の理由はそれだけで十分かとも思われる。しかし、すでに指摘したように、カントの初期自然哲学と批判的自然哲学とのあいだには大きな懸隔があり、とりわけ当該『天界論』の中核をなす物体の力学（および生命概念）に関して、カントは批判の一大変革を経験したばかりである。理性批判の成果の正確な理解が一般公衆に定着していないこの時期に、かつての形而上学的思弁の跡をあらためて公開するのは、けっして得策とは思えない。それにもかかわらず、なにゆえにカントは自らすすんで本書の再刊を希望したのか。

何よりも、批判の完結という事態が理由だと考えられる。若い日のカントの思弁は、理性批判によって秘匿されるの

ではなく、むしろ批判のおかげで、ようやく陽の目を見る  
ことができたのだ。くわえてまた、あの血氣盛んな若い思  
弁のおりにも自説の蓋然性を強調した、カントの当初から  
の哲学的誠実と慎重さが、批判以後の本書の再刊を許容  
可能なものにした。独断からの覚醒というカント自身のあ  
の告白に依拠して、前批判期（とくに初期）の自然哲学は、  
当時の合理主義的独断論の枠内にあるものとされるのが一  
般的だが、少なくともカントはその語り口において、若い  
頃から思索的・探究的であって、けっして独断的ではなかつ  
たのである。

じつさい、『天界論』の序文でカントはあらかじめ弁明  
し、この試論が「わずかな臆測にもとづく危険な旅行」（  
221）の「大胆な企て」（1225）であること、そしてその諸  
理論・諸仮説にはそもそも「最大の幾何学的な厳密性や数  
学的な無謬性」（1235）などは望むべくもなく、それゆえ  
にこれを基準に本書を裁いてはならず、むしろ蓋然的諸仮  
説にもとづく論証の論理的一貫性という点にのみ本書の信  
頼性もあること、しかも自分は「最大の驚嘆すべき対象の  
魅力」（*ibid.*）に誘われて、「構想力」（*ibid.*）の翼を過度に  
広げているところもあるので、この点はどうか寛恕願いた  
い旨、じつに率直に語っている。

そういえば、カントは批判期まったただなかの啓蒙雑誌論

文『人間の歴史の臆測的始元』（一七八六年）でも、人類  
最古の史料と目される『旧約聖書』創世記第二章（エデン  
の園）から第六章（ノアの洪水）までを「地図」に見立て  
て、人間史の曙の時代の「遊覧旅行」を楽しみ、「構想力  
の翼」にのった「臆測」の「気晴らし」に興じていたので  
あった。<sup>41</sup> 私の見るところ、この時期にカントは、順次刊行  
されつつあったヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744—  
1803）の『人類史の哲学の構想』の批判的吟味をとおして、  
理論的実証的であるべき自然史と、実践的道德的な意図に  
基づく人間の自由の歴史とを、方法的に厳しく区別する  
必要を感じ、この小論で初めてその批判的区別を自覚しな  
がら、先行する『世界市民的見地における普遍史の理念』  
（一七八四年）に盛られた人類史の哲学の全体構想を、きわ  
めて魅力的な一篇の物語りとして著したのであった。

かたや、自然の「有機的な力」を万物の生成の統一的な  
原理として前提するヘルダーの有機体論的歴史哲学は、か  
つてのカントの『天界論』ときわめて近い関係にあり、  
この点でヘルダーは若いカントの正統の弟子だったとさえ  
いえる。ヘルダーが『構想』で、師の『天界論』を念頭に  
おきつつ、コペルニクス、ケプラー、ニュートン、ホイヘ  
ンスとならべてカントを称え、カントと同種の宇宙論をもつ  
て同書の叙述を始めていることは、哲学史の皮肉としてま

ことに興味深い。にもかかわらず（とヘルダーは心外に思ったことだろう）、かつての弟子に対するカントの批判的論評の刃は鋭かった。カントがヘルダー歴史論で問題にしたのは、自分も一年前（『普遍史の理念』執筆時）まで陥っていた自然史と人間史との無批判的接合と、弟子ヘルダーの詩的にアナロジーを駆使する独断的形而上学的思弁と、「概念を規定する際の論理的な綿密性」（Ⅳ45）の欠如と、であった。

この批判期に、カントにおいては、感性と理性、認識と思考、現象と物自体、理論と実践、自然と自由等々、一連の批判的区別の作業が進行中であり、それにもなつて個々の概念の厳密な規定も確定しつつあった。いわば批判哲学の建築の設計と、資材調達と、施工とが一時にすすめられていたのである。そして、そのような大切な時期にあえてカントが取り組んだヘルダー歴史論との対決は、同時にまた、過去のカント自身との批判的対決でもあった。カントは非常にきわどく険しい批判の「小径」を独り歩んでいたのである。そして、その作業が完結し、同時に批判哲学の体系が建立されたそのとき、とりわけ目的論的自然哲学の批判的吟味が完了したことによって、ようやくあの『天界論』を、いわば若く生き生きとした構想力による哲学的ファンタジーとして、再刊することが可能になった。『天界論』

は、批判によって批判のゆえに、その学説の蓋然性の徹底的な自覚のもとに、再度の刊行を許されたのであった。

#### 八、批判期カントの道德的世界の建築術

批判とは、なによりも人間理性の認識能力の限界画定であり、経験的理論的に認識可能な事柄とそうでない事柄との峻別である。カントは、道德的实践と理性信仰とに場所を空けるために、理論的認識の権限の及ぶ対象範囲を現象に制限した。しかしそれは、それを超えたものについて何かを考え語ることをも、人間理性に禁じるものではない。カント自身、つねに批判的な慎重さをもつてであるが、超感性的なものや、物自体に属する事柄について（とくに道德的实践的な見地から）実に多くを語っている。そして（第二批判の要請論では）、自由、魂の不死、神の存在についての道德的实践的な認識の可能性を主張してさえいる。

神の世界建築術の思想との関連でいえば、神の存在の思弁的論証の不可能性と、道德的理性信仰に依拠した道德的証明の可能性との洞察が、カントの批判的画期となっている。神の存在の思弁的認識を断念しながらもなお、カントは神について語ろうとする。人間理性の自然本性に従ってやむにやまれずに、である。神は知覚されえないのだから、



現実存在するとは確言できない。しかし、知覚されないからといって、存在しないとも断言できない。カントはそうした（思弁的に）有無未規定のところ、あえて神を語るうとする。

しかし、人間的認識と神の存在とは、現象と物自体のごとくに次元を異にしている。そしてそのあいだをつなぐものは、もはやアナロジー（類比、類推）しかありえない。しかも、たんに事柄どうしの類似性を指摘して、詩的連想をたくましく展開するばかりの（ヘルダーのような）無批判なアナロジーではなく、その類似性に着目しつつ、しかも同時に、そこで絶対に埋められぬへ差異をどこまでも凝視しつづけるアナロジーである。事柄の差異と類同性との自覚による構想力の間接推理、これが批判期カントのアナロジーの基本であり、そうしたアナロジーに基づく臆測を、彼は臆測として語ろうとする。

ただし、臆測はたんなる妄想や夢想にばかり終わるものではなく、道徳的実践的な意図と、論証の論理的整合性に支えられるときには、高度な信憑性を備えた確信となる。そしてまた、実践のためには、そうした信憑に基づく確信だけで十分なのだと、カントはいう。素朴な信仰に衝き動かされた独断的思弁をいましめ、構想力の無批判な暴走を矯めて、理性の自己矛盾の無政府的騒乱を回避しつ

つ、経験的な所与を超えてなおも進もうとする理性的思考をへ正しい方向へと導くことへ、これがカントの理性批判の眼目である。

さて、人間的認識の限界の画定と、その枠内におけるア priori な認識（空間・時間、諸カテゴリー、そしてそれらに依拠した純粹悟性原則）の客観的妥当性の権利主張の正当化との長い作業をひとまず終えて、カントは『純粹理性批判』の超越論的弁証論第一章第一節「理念一般について」を、プラトンのイデア論との直接的な対話の場にあてている。<sup>42</sup>そしてこの「崇高なる哲学者」が「自分自身を理解した以上に、よりよく彼を理解する」ことをめざして（vgl. A313-4=B370）、カントは以下のように述べている。

人間的理性がそこで本当の原因性であることを示し、諸理念 *Ideen* が作用因（行為とその対象との作用因）となるのは、道徳的なものにおいてのことである。しかしプラトンはここにおいてのみならず、自然そのものに関しても、それがイデア *Ideen* に起源を発するという明白な証明を見ており、これは正当であった。一つの植物、一つの動物が、そして世界建築の規則正しい配置 *Anordnung*（それゆえにおそらくまた自然秩序の全体）が明瞭に示しているように、これらはイデアに従っての

み可能である。たしかに個々の被造物は、それぞれがその現実存在の条件のもとにあるので、自分の種<sup>Art</sup>の最も完全なもののアイデアに一致しているわけではない（だからたとえば人間は人間性のアイデアに一致していないが、それでも人間はそのアイデアを自分の行為の原型<sup>Urbild</sup>として自らの魂のうちに携えている）。これにたいして、かの「自然の」アイデアは、最高の悟性において、個別的に、変わらぬ仕方、汎通的に規定されており、そのアイデアは諸物の根源的な原因となっている。そして、この世界全体における諸物の結合の全体<sup>das Ganze ihrer Verbindung im Weltall</sup>だけは、またそれのみが、かのアイデアに完全に適合しているのである。表現の大げさな点を除けば、この哲学者の精神の高揚、すなわち世界秩序の自然的なものを模型として観察することから始めて、諸目的つまりアイデアに従った世界秩序の建築術的な結合へと上昇してゆく高揚は、尊敬と継承に値する努力である。また、道徳性と立法と宗教との諸原理に関わるものにおいては、アイデアこそが初めて経験そのもの（善なるものの経験）を可能にするのであるから、アイデアが経験のうちで完全に表現されえないにせよ、彼の精神的高揚の本来の功績は、まったくもってこの諸原理にかんじてこそ認められるのである。人びとがその功績を認め

ないのは、彼らがそれをまさに経験的な諸規則によって判定しているからにすぎない。しかし、原理としての経験的諸規則の妥当性は、まさにアイデアによって無効にされるべきものであったのである。じつさい、自然の考察においては、経験がわれわれに規則を手渡してくれるし、経験こそが真理の源泉なのであるが、これにたいして道徳的諸法則に関しては、経験は（残念ながら！）仮象の母である。そして、私がなすべきことについての諸法則を、なされていることから導き出したり、あるいはそれによって制限しようとしたりすることは、最も非難すべき事柄である。（A317-9=B374-5）

ここにまず、カントの若い日からの世界建築の思想が、キリスト教の創造神を介して、さらにプラトンのデミウルゴスとも近親関係にあることが明らかである。しかも批判期のカントが依然としてデミウルゴスの世界建築の思想に強い共感を懐いていたことは、カントがプラトンの自然のアイデア論に同調して、その高揚した建築術的世界認識の正当性を、接続法ではなく直説法でかたっていることから察知できる。そして彼にいわせれば、ここで問題となるのは、プラトンの「表現の大げさな点」だけであるかのようにさえある。

とはいえ、その表現法の過剰への指摘は、カント自身の過去の『天界論』にも向けられたものなのだ、とも読める。しかも注意深くみれば、カントが「尊敬」し「継承 Nachfolge」する必要を認めるプラトンの思弁の高揚は、その到達点を創造神ではなく、目的論的な「世界秩序の建築術的結合」にまで抑制されているし、そもそもカントはこの箇所に先立つ重要な脚注で、プラトンの「可能的経験」を越えた「思弁的認識」の「拡張」、とりわけアイデアの「神秘的演繹」と「実体化」には、けっして「追隨することができない」とを、明確に宣言している(vgl. A314=B371)。

なによりも、カントのへ批判的解釈学的なプラトン解釈の力点は、理論的思弁的認識から道德的实践へという、カント自身の哲学的本領の批判的移転に歩調をあわせるかたちで、自然神学的建築術から道德的世界建築術へと大きくシフトしている。<sup>(43)</sup> 引用本文に見られる「植物」や「動物」といった生物有機体に先立って、カントは「プラトンの共和国」(A316=B372)を話題にしているが、そこでカントは、プラトンのイデア論の道德的实践的な根本動機を確認しながら、カント自身の法的政治的共同体の「必然的な理念」、すなわち「各人の自由が他のすべての人の自由とも共存しうるようにする諸法則に従った、最大の人間的自由

の憲法体制 Verfassung」の理念を語り、さらにこの完全な原型的共同体への不断の接近という、彼の人間史のモチーフをも語り始めている。<sup>(44)</sup> そもそも、カントの超越論的弁証論の課題は、「純粹理性の超越論的使用と、その諸原理および諸理念を正確に知る」ことによって、「あれらの莊嚴なる道德的な建築物 jene majestätische sittliche Gebäude」のために、地盤 Boden を平坦かつ強固 baufest なものにする」こと、その意味での、道德的世界建築のための(基礎づけ Grundlegung に先立つ)地盤の地ならしにほかならぬのである(vgl. A319=B375-6)。

#### 九、体系的世界認識の批判的統制原理

魂、世界、神という伝統的な特殊形而上学の主題をめぐって、人間理性は徒な思弁の「宝」探しに没頭し、道德的「建築作品」のうち立てられるべき「地盤」の「いたるところ」に「モグラの坑道」をはりめぐらして、あの建築物を「不安定な」ものにしてきた(vgl. A319=B375-6)。超越論的弁証論は、魂の実体性、単純性等をめぐる純粹理性のパラロキシスム、世界の始まりや自由等の有無をめぐる純粹理性のアンチノミー、そして神の存在の思弁的論証の論理的な不備を指摘し、それら一連の誤りを回避して、人間

理性を無政府状態から救い出し、あの無数のモグラ穴を埋める地盤固めの基礎工事を敢行する。そもそも魂の不死、自由、神といった理念は、基本的には純粹理性の思弁よりもむしろ、道德的実践的関心に応えるべきものである。これらの理念は、世界認識に関して新たな対象認識を何も提供せず、それゆえ経験的認識に関して「構成的」ではない。とはいえその諸理念は、あの実践的関心との関連のもとに、経験的世界認識に關与する思弁理性の「統制的」「統治的・統率的」な原理として重要な役割を担い、人間の内的自己意識と世界全体との認識の体系的理性統一を可能にするものである。

理念による認識の体系的統一という論点が、批判期カントの建築術思想の骨格をなすものであることは、あらためて述べるまでもない（第一節参照）。ここで確認したかったのは、第一に、カントの「超越論的弁証論」が、当初から終始一貫、建築術的に動いているということである。そして第二に、そこでのカントの批判的論述が、いわば人間理性の建築術的な自然本性によって衝き動かされたものであった、ということである。理性の（宇宙論的）というよりはむしろ）「世界論的 *kosmologisch*」理念をめぐるアンチノミー論の第三節「理性の関心について」で、理性の「実践的関心」と「思弁的関心」（これらは正命題に肩入れ

する）、および「経験主義」的関心（これは反対命題に肩入れする）にふれたうえで、カントは以下のように述べている。

人間の理性は、その自然本性からいって建築術的、*ihrer Natur nach architektonisch*である。言い換えれば、人間理性は、あらゆる認識を一つの可能的体系に属するものと見なす。それゆえに人間理性は、目の前にもっているひとつの認識が、あるなんらかの体系において他の諸認識と共存することを、少なくとも不可能にすることのないような原理しか承認しない。ところが、上述の反対諸命題（アンチテーゼの諸命題）は、認識の建築物の完成をまったく不可能にするような、そうした種類のものである。それら反対命題に従うと、世界のどんな状態にも、常にそれに先立つ状態があり、どんな部分のなかにも、さらに分割される部分が含まれており、世界のどんな出来事の前にも、それとまったく同様に他のもつと前の出来事から生じた出来事があり、そしてまた、現実存在一般においては、一切のものは条件つきであり、何らかの無条件的な第一の現実存在というものは認められない、ということになる。つまりこれらの反対命題は、決して或る第一のものを許容しないし、またこの建築の基

礎として端的に、schlechtlin zum Grunde des Baues  
役立ちうるような始元 Anfang をけっして認めようとし  
ないのであって、それゆえに、かかる前提のもとでは、  
認識の完全な建築物はまったく不可能である。それゆえ、  
理性のこの建築術的関心（この関心は、経験的統一では  
なく、純粹な理性統一をア priori に要求する）には、  
正命題の諸主張の自然的推奨がともなうことになる。

(A474-5=B 502-3)

カントの批判的建築術は、人間理性の自然本性にもとづく  
体系の技術である。そしてそれゆえに、アンチノミーの各  
正命題には理性の「自然的推奨」が伴うのだといわれる。  
「理性の自然本性からいって」という文言は、ここだけを見  
るかぎりでは、あの建築術的欲求ないし関心が、理性の  
本性に根ざして、きわめて強く深いものであることを言う  
だけで、その建築術そのものの基本性格については（反自  
然的とも自然親和的とも）何も述べていないようにも読め  
る。しかし、われわれはすでに、若いカントの世界建築術  
が「原一自然」としての神の世界設計と、それを自主的に  
引き受ける「自由な生ける自然」との、「協働」の創造の  
営みであることを見てきている。ここ、理性批判というコ  
ンテキストにおいて、カントの世界建築術の思想は、神と

自然との世界創造の事柄から人間理性の世界認識の事柄へ  
と、その体系的な位置価を大きくシフトさせてはいる。し  
かしここでもなお、問題となっているのは「世界」である  
ことに変わりはない。しかも、かつて物（存在するもの）  
の内なる自然本性として活躍していた自然は、ここでも人  
間理性の内なる自然本性である。理性（自己）と自然（世  
界）とを始めから近代の「主観―客観」対立図式で捉えて  
しまふ通常のカント解釈の道筋を却下して、むしろカント  
批判哲学そのものの生成の筋道に即して理解するならば、  
ここで理性の自然本性とは、それ自身が自由なる自然とし  
て、世界万物の内なる自然本性とともに、それに育まれつ  
つ生成してきたものだ（かつては形而上学的にそう確信  
されていたし今でも批判的に）想定されているはずである。  
そして人間理性（模型的知性）の自然本性的建築術は、あ  
の自由な自然の世界創造をはるかなる原型として見やりな  
がら、それに批判的に「倣った nach」体系的な世界認識の  
企図なのだといえるだろう。人間理性の世界建築術は、あ  
の原型的な自然の建築術に憧れながら、それを「めざして  
nach」遂行される。そういったすべての意味で、カント  
の批判的建築術は、ここでもすでに自然の技術 Technik  
der Natur なのである。

ところで第三に、このテキストで、批判的建築術の人間

理性は、あの道徳的建築物の建築に先立って、経験的世界認識の体系的統一を問題にしており、あの四つのアンチノミーがいずれも、体系的世界認識の四つの礎石（無制約的な「第一のもの」ないし「始元」、つまりアルケー）の定礎を揺るがすものであることを指摘している。話題は明らかに、認識論的世界建築の基礎づけである。

コギトという「アルキメデスの点」を確固不動の基礎にすえ、そこから確実な学知をまったく新たに建築しようとしたデカルト以来、総じて近代の認識論的哲学は基礎づけ主義的であり、カントの超越論的哲学もこの系譜に属する、というのが、今日の哲学研究一般が教科書的に解説するところである。また、そうした近代哲学の「究極的基礎づけ」の企ての不可能性については、たとえば批判的合理主義者ハンス・アルバート<sup>(46)</sup>のいう「ミュンヒハウゼンのトリレンマ」を始めとして、きわめて多くが語られており、知や価値の相対主義の問題ともからんで、現代哲学の主要論点にもなっている。

しかし、カントの建築術は、はたしてこうした基礎づけ主義の文脈に埋没するような性質のものとして捉えてよいものなのだろうか。そして彼の構想する体系建築は、いわゆる近代建築のように硬直的なものなのだろうか。確認したように、カントはたしかに道徳の、そしてまた世界認識

の建築物の基礎を求めて、理性批判を行った。そしてこのアンチノミー論に関していえば、正命題の主張する世界の始まりや自由の存在が、明らかに「端的な基礎」となるべきものとして求められている。しかしそれらはいくまでも「理念」であり、しかも経験的世界認識の体系的統一のための「統制的」原理にすぎない、といわれている。さらに、これらの理念をそのような仕方では建築術的に活用してゆくにあたっては、「純粹理性の法廷」において、正命題の実践的利益関心と、反対命題の経験主義的利益関心とを矛盾対立させることなく（物自体と現象との批判的区別によって）調停するという、読者公衆に公開された、正規の司法手続きが踏まれているのである。経験的認識の原則をまげることなく、かえってむしろ経験的認識全体の体系的統一のためにも、道徳的実践的理性関心を優先して、諸理念を建築術的に活用してゆくことを勧告する批判の司法裁定。これをしも人は、無限背進（ないし循環論証）の「独断的な中断」とみなすのだろうか。カントは<sup>(47)</sup>決して、いわゆる「究極的な基礎づけ」を企てているのではない。それを誤解して、カントの批判的判決 *Kritisches Urteil* をも「独断的」として排斥するとき、おそらく人間理性には、そもそも一切の前向きの知的建築術は不可能となり、人類はただひたすら否定的解体的な、脱構築の（脱）のみの反

復に終始せざるをえなくなるだろう。

## 十、批判的理性そのものの建築的生成

ところで、理性の自然本性に即した建築的関心は、たんに弁証論のみならず、むしろカントの理性批判の哲学全体にとって、きわめて重要なものであった。この点についてはすでに第二節で、批判哲学の生成の履歴を示す外的な状況証拠によって確認したことでもあるが、ここではさらに、少しでもその批判的思想の内実に迫るかたちで、あらためて考察してみることにしよう。

そもそも、世界認識をめぐるあのアンチノミーが、理性批判をカントに強く促したものであったことは、カント自身が語る「独断のまどろみ」からの「覚醒」という印象的な言い回しとともに、よく知られているところである。

神の現実存在や〔魂の〕不死等の研究は、私の出発点ではありません。むしろ、純粹理性のアンチノミーこそが私の出発点でした。「世界には始めがある——否、世界には始めがない」から、第四〔批判書では第三〕の「人間には自由がある——いやそれどころか自由はなく、人間においてはすべてが自然必然である」にいたるまで。

自然の技術としての建築術——カントの体系思想

このアンチノミーが、私を独断的なまどろみ *der dogmatische Schlummer* から目覚めさせ、理性そのものの批判に駆り立てたものなのです。理性がそれ自身と見かけ上矛盾するというスキヤンダルを除去するために。(一七九八年九月二一日付けクリスティアン・ガルヴェ宛書簡、XII 257-8)<sup>(48)</sup>

そして、これもまたよく取り上げられるように、同様の表現は、「原因と結果の結合の概念」に関する厳しい疑念を表明したヒュームの名前とともに、やはりきわめて印象的なしかたで用いられている。<sup>(49)</sup>

私は率直に告白する。あのデイヴィッド・ヒュームの抗弁 *Erinnerung*〔督促〕こそが、何年も前に初めて私の独断的なまどろみ *der dogmatische Schlummer* を打ち破り、思弁哲学の領野における私の諸研究に、まったく別の方向 *eine ganz andere Richtung* を与えてくれたものである。とはいえ、彼の諸帰結に堪しては、私はとうてい彼に耳を貸すことができなかった。あれらの帰結が彼に生じてきたのは、たんに彼が、自分の課題を全体的に、*im ganzen* 思い描くことなく、ただその一部分、*ein Teil* にのみ飛びついたからである。しかし、部

分は全体を考慮に入れないと、何の情報も提供してくれない。仕上げられ *ausführt* なかったとはいえ定礎された *gegründet* 思想が、着手され、その思想が他人によってわれわれに遺産として残されているならば、これは十分に期待してよいことであるが、この思想を引き継いで思索を続けていけば、この聡明な人物の行き着いたところよりも、さらに遠くまで進展してゆくことができるだろう。ともあれ、この光明 *Licht* の最初の火花、*der erste Funke* については、この人物に感謝しなければならぬ。／それゆえ私はまず、ヒュームの異論が普遍的に思描かれるものではないかどうかを試みた。そして直ちに、原因と結果の結合の概念は、それによって悟性がア priori に物の諸結合を考えるただ一つの概念だ、などとはとても言えず、むしろ形而上学は全体として *ganz und gar* こうした「ア priori な」諸結合から成り立っているのだ、ということを見いだしたのである。私はこれらの結合の数を確定しようとした。そして、このことが私の望みどおりに、すなわち唯一の原理から成し遂げられたので、私はこれらの概念の演繹にとりかかった。そして今や私は、これらの概念が、ヒュームの憂慮したように経験から導き出されたものではなく、純粹悟性から生じたものであることを確信したのである。……いま

や私は、ヒュームの問題をたんに一つの特殊事例において解決しえたばかりでなく、むしろ純粹理性の能力全体 *das ganze Vermögen* に関して解決することができた。こうして私は、ひたすらゆったりとした、しかし確実な歩みを重ねて、ついには純粹理性の全範囲 *der ganze Umfang* を、この範囲の限界 *Grenzen* 「外枠」ならびに内容 *Inhalt* 「内実・中身」にかんして、普遍的諸原理に従って完全に規定することができた。そしてこのことは、一つの確かなプラン *Plan* 「計画、企画、設計図、図面」にしたがって形而上学の体系を築き上げる *aufführen* ために、形而上学が必要としたことだったのである。／しかし、ヒュームの課題をできるかぎり最大に拡張したかたちで仕上げたものの *die Ausführung* （すなわち『純粹理性批判』）は、この課題そのものが初めて思い描かれたときにそうであったのと同じような目にあうのではないかと、私は恐れている。(IV 260-1)

『プロレゴメナ』（一七八三年）の「序文」全体は、ヒュームとの直接的な批判的対話に供されており、この箇所にも明瞭に現われているように、そこでのカントの叙述は建築術のメタファーを頻発するものとなっている。それはもちろん、たんにカントの無意識の筆の勢いによるものではない



い。むしろカントは、学としての「将来的な形而上学」の可能性を確保するという本書全体の基本課題を述べる序文の本筋に即して、ヒュームの「破壊的 zerstörend な哲学」(IV 258 Anm.)に対抗するために(そしてまたこれによって現代のポストモダンの個々の否定的な物言いに對してもあらかじめ釘をさしておくために)、あえて自覺的に建築術のメタファーを活用しているのである。

カントによれば、「主として」(IV 257)因果性という「ただ一つの」概念に對して投げかけられたヒュームの懷疑は、この概念の「自然認識全体」に関わる經驗的な「使用」の正当性、有用性、不可欠性を問題にするものではなく、あくまでもただ、これまでアプリアリとされてきた「この概念の起源」に疑念を表明し、従来の独断に抗弁して、原因概念のアプリアリな起源に関する權利主張の正当化を、人間理性に初めて督促するものであった(IV 258-9)。形而上学の歴史上で最も「決定的 entscheidend」な「攻撃」となったヒュームの懷疑の一撃によって、「一閃の火花」が飛んだ(vgl. IV 257)。ちなみにいいで“entscheidend”とは、「危機的、致命的、決定的」という意味の“kritisch”の同義語であり、そのようなものとして、ヒュームの懷疑(スケプシス)が、形而上学の歴史を切斷する「分かれ目」としての画期(エポケーの時)をなすも

であり、理性批判によるあの「形而上学の全体的な革命」(B XXII)を呼びかける最初の烽火でもあったことを意味している。「懷疑主義」ならざる「懷疑的方法 skeptische Methode」の批判的重要性については、アンチノミー論のなかでも語られるところであるが、カントの「独断的なまどろみ」は、まさにヒュームの懷疑の放った火花の一瞬の閃光によって打ち破られたのであった。

それゆえに、カントはヒュームを「聰明なる人物」とも「聰明なる先駆者」(IV 260)とも呼んで称え、彼の放った「最初の火花」に「感謝し」つつ、彼としばし親密に語らうのである。そして「ヒュームは健全なる悟性〔常識〕を權利主張しただけでなく、……そのうえさらに……批判的理性を權利主張することもできたはずである」(IV 258-9)と、ヒュームの哲学的不徹底を惜しむのである。

カントの敢行した理性批判と、これに依拠した形而上学の「全体的な改革 eine gänzliche Reform」(IV 258)とは、ヒュームの着手した批判の端緒——すなわち「仕上げられなかったとはいえ定礎された思想」——を遺産として繼承し、先人ヒュームをはるかに超えて、その思想の批判的本性を徹底的に自己展開させたものであり、その意味で「ヒュームの課題をできるかぎり最大に拡張したかたちで仕上げたもの」なのである。

ところで、このテキストで建築術的であるのは、「定礎」とか「仕上げ」といった文言ばかりではない。むしろここ、カントとヒュームとの批判的対決においては、終始一貫して、形而上学の体系の全体と部分との建築術的關係（あるいは批判的解釈学的關係）こそが、主要論点となっている。カントは言う。私はヒュームの懐疑における批判の最初の閃きには敬意を表するものの、「彼の諸帰結に関しては、私はとうてい彼に耳を貸すことができなかった。あれらの帰結が彼に生じてきたのは、たんに彼が、自分の課題を全体的に思い描くことなく、ただその一部分にのみ飛びついたからである。しかし、部分は全体を考慮に入れないと、何の情報も提供してくれない」と。ここで「部分」とは、原因概念という、形而上学的諸原理の「たんに一つの特例事例」のことをいう。ヒュームの懐疑は（そしてまたことによると現代のただひたすら否定的なだけに見えがちなポストモダンの個々の批判的営為も）、そうした部分にのみかかずらわったがために、批判の「最初の火花」を放っただけで終り、数々の「破壊的な」帰結をもたらすばかりで（それはたしかに思想的には魅力的でもありセンサーショナルな効果をもたらさしうるものもあるが）、形而上学の「認識に光明をもたらさなかった」のである。しかし、「もしもこの火花が感度のよい火口<sup>ほくち</sup>に当たって、そのかすかな

輝きが注意深く保存され、大きくされたとしたら、この火花をきっかけにして、きつと一つの光明が灯されたことであろう」（IV 257）。ヒュームの懐疑の「火花」は、思想の引火物に点火して、燎原の火のごとくに世界認識全体へと燃え広がり、カントの批判哲学の革命的「光明」へと、大きく成長しなければならない。

いうまでもなく、ここで「感度のよい火口」とは暗にカント自身をさしている。部分のみを問題としたヒュームに對して、カントは、その部分に形而上学の全体をも揺るがす大問題を見た。そして、人間的世界認識の全体を考慮しつつ（当然のことながらこの問題意識はあのアンチノミー論に直結する）、この部分の問題を引き受けたのである。部分に反応したヒュームの批判の一瞬の閃光に打たれて、カントの理性は批判哲学の種子を宿し、これをできるだけ大きく育て上げることを使命として引き受けた。かくしてカントの「批判的理性」は、ヒュームの課題を「普遍的に思い描き」、たんに因果性のみならず、すべてのアприオリな概念の「演繹」に努めて、あの課題を「純粹理性の能力全体にかんして解決すること」をめざしたのである。

理性批判は、理性の自己認識として、「純粹な思考にのみ従事するかぎりでの理性の自然本性のうちへと、きわめて深く入り込む」（IV 259）ことを必要とする。この難事

業に取り組むにあたって、カントの批判的理性は、理性の自然本性に属する「建築術的思考法」を、自らの方法として自覚的に採用せざるをえなかった。というよりもむしろ、人間理性の「建築術的自然本性」の徹底的な自覚のゆえに、カントの批判的理性は、それに基づいておのずと大きく成長したのだ、と言った方が適切かもしれない。いずれにせよ、『プロレゴメナ』序文（そしてそれが概説する『純粹理性批判』そのもの）の建築術のメタファーは、たんに形而上学の体系建築という周知の企図を表明するばかりでなく、同時にまたカント批判哲学そのものの建築術的な出自をも、きわめて本質的な仕方で示唆しているのである。

そして最後に、カントの「独断のまどろみ」を破った二つのもの、すなわち因果性へのヒュームの懐疑とアンチノミーという二つの大問題は、まさしく批判哲学を建築術的に形成する部分（ただ一つ概念）と全体（世界認識）として、本質的に結びついている。この二つの難問はさしあたり、事柄としてはまったく別個のものであり、ことによるとカント個人を悩ませ始めた時期も微妙にずれるのかもしれない。しかし、部分の問題のうちに全体の問題を認め、また全体の視界のうちに部分を見えるという建築術的体系的思考（それは批判的建築術的弁証法とも呼べるかもしれない）の要請からいえば、この二つの問題の発生は、少なく

とも修辭的には同時である。したがって、あの「独断のまどろみからの覚醒」の二つのケースは、本質的に同じ事態を言い表している。そしてそれは同時に、カントの批判哲学の自然本性的に建築術的な生成の実態をも、重ねて示唆していたのである。

## 十一、自然神学的世界建築術の批判的変異

こうして、カントの理性批判の哲学は、人間理性の自然本性的な建築術的関心に基づいて、本質的に建築術的に自己形成したのであった。いまや、『純粹理性批判』方法論第三章の「純粹理性の建築術」という表題も、こうした含意のもとに理解されなければならない。そして、これまでもしばしば確認してきたことではあるが、その建築術の章全体、そして同書第二版序文からのあの引用文（拙稿序文参照）、ならびに前節で取り上げた『プロレゴメナ』序文からの引用文など、カントの多くの証言からも明らかのように、新たな形而上学の体系建築の基礎づけをめざす批判哲学の文脈において、人間理性の建築術とは、何よりも世界認識の学的体系の建築術なのであった。

ところで、こうした批判的事情のもとに、若い日のカントが熱中した神の世界創造の建築術は背景に退き、その様

相も一変することになる。その変異のメルクマールはきわめて多岐におよぶが、ここではただ「世界建築家」の概念の異同についてのみ、簡単に確認しておくことにしたい。

一七五五年の『天界論』で、神の世界建築の思想は、自然神学的な神の存在論証という強い宗教的関心によつて語られだされていた。一部重複もあるが、批判期とのコントラストを明確にするために、また四、五、六節の復習の意味もこめて、ふたたび『天界論』から引用しておこう。

これ「エピクロス学派」にたいして私の学説においては、物質は一定の必然的法則に拘束されている。物質が全面的に解体し分散しているときでさえ、そこから美しい秩序だった全体がまったく自然に展開する。この全体はまたまた偶然に生じるのではなく、物質の自然的特性によつて必然的に生じるのである。してみればわれわれは、こう問わざるをえなくなるのではないか。互いに独立した自然本性をもつ多くのものがおのずと互いに規制しあつて、秩序整然たる全体を生みだすなどということは、はたして可能であつたらうか。そしてもしこれらのものが実際にそうした全体を生み出すとするなら、それらの最初の起源は共通しているということ、そしてこの最初の起源とは、万物の自然本性の目的が互いに調和するよう

には、はからつた完全な自足的な最高の知性であるということが、明らかに証明されるのではなからうか、と。／＼したがつて万物の原素材である物質は一定の法則に拘束されておられ、妨害を受けずにこの法則にしたがえば、必然的にすばらしい結合を生みださざるをえない。物質にはこの完全性の計画からのがれる自由などない。それゆえ物質は、最高に知恵深き意図に服しているのだから、物質を支配する第一原因によつて必然的にこのような調和した関係をもたざるをえなかつた。そして、自然はカオスのなかにあつてさえ規則的かつ秩序だつてはたらかざるをえないというまさにこの理由によつて、神は存在するのである。(I 227-8)

ところが、これもすでに指摘したように、自然神学的な神証明の論証力に関しては、一七六三年の『唯一の証明根拠』論文を介して、一七八一年の『純粹理性批判』にいたるまでに、厳しい批判的吟味がほどこされ、その「超越論的理想」の章の第六節「自然神学的証明の不可能性について」で、明確に否定的な見解が述べられることになる。<sup>51</sup>

この「自然神学の」推論にしたがうとき、かくも多くの自然設備の合目的性と良好な押韻的調和とによつて証明

されるのは、たんに形式の偶然性だけであって、質料〔物質〕の偶然性、つまり世界における実体の偶然性は証明されないにちがいない。というのも、後者の証明のためには、さらに以下の点が要求されるだろうから。すなわち、世界の諸物はそれ自体、普遍的な諸法則にしたがうこのような秩序と調和とをもたらさえず、それらがその実体からみても、最高の知恵の産物でなかったとするならば、まさにそうなのだ、ということが要求されるのである。しかしそのためには、人間的技術とのアナロジーによる説明根拠とはまったく異なった証明根拠が必要となるだろう。それゆえ、この証明が証明しうるのは、せいぜいのところ世界建築家 ein Welthaumeister、つまり自分が加工する素材の適格性によっていつも大いに制限されるであろう世界建築家であって、万物を自分の理念のもとに従える世界創造者 ein Welterschöpferではないことになる。そしてこのことは、目の前にある大きな意図、つまりある充足的な根源存在者を証明するという意図を満たすには、はなはだしく不十分である。われわれが質料〔物質〕そのものの偶然性を証明しようとするならば、われわれは超越論的論拠〔世界論的証明を介して存在論的証明へと遡る論拠〕を逃げ道としなければならぬが、しかしこのことは、ここではまさに避けるべき

自然の技術としての建築術——カントの体系思想

ことであつた。(A626-7=B654.5)

ここに見られる「世界建築家」と「世界創造者」の区別は、自然神学的論証の論理的不備をつくカントの理性批判の核心をなすものとして、これまでも多くの研究者によって注目されてきたものであるが、カント建築術思想の批判的変異の実態を追跡するわれわれにとっても、決定的に重要なものである。

そもそもあの『天界論』では、世界建築と世界創造は同義であり、神はまさに世界建築家として世界を創造した。しかもそのとき、万物を無から生み出す神の摂理と創造は、物の自然（とりわけ物質の内なる自然力）と一体になってはたらし、神自身は設計者および監督者の立場に徹して、世界建築の施工そのものは、へ自由な生ける自然への自己形成のおのずからなる展開に委ねられていた。そして、こうした事情から、世界の「美しい秩序だった全体」という論拠に基づいて、いとも容易に「万物を自分の理念のもとに従える世界創造者」へと上昇することができたのであった。

理性批判の刃は、ここにさまざまな切断線を刻みこむ。第一に、批判的な「物質」概念はすでに機械論化されており、あのへ自由な生ける自然への絆帯を断ち切られてい

る。世界を構成する物質は、もはやかつてのような自己形成の能力を失っているのである。そこから第二に、たんなる物質としての「質料」とその「形式」とが、決定的な仕方で分断される。かつては、「万物の自然本性の目的が互いに調和するようにはからった完全に自足的な最高の知性」の統率・統制のもとに、物質は「まったく自然」かつ「必然的に」調和的世界を形成したのであったが、それに対して近代的な批判的理性の視界においては、秩序や美といった合目的な「形式」は、「世界の諸物にまったく異他的なものであり、それら諸物にたんに偶然的に付着しているにすぎなく」(A625=B653)。

第三に、このように「質料」にたいする「形式」の徹底的な外面性が語られるとき、この両者の関係は「人間的技術 *menschliche Kunst*」を基準にして、これとの「アナロジー」に基づいて理解されている。そして、まさにこのアナロジーの射程内にあるか否かという点で、「世界建築家」と「世界創造者」が区別されるのである。つまり、ここで「世界建築家」の建築術(それはプラトンのデミウルゴスにはば対応する)は、人間的技術、すなわち所与の物質素材を前提にして、その固有性質に「制限」を被りながら、これに外から形を与える人為技術と同型のものとして語られており、そこにはもはや、かつての『天界論』で見

せた「偉大なる工作主任」(キリスト教の創造神に対応する)の面影は見られない。

このことは、第四に、必ずしも世界建築術の思想の破棄を意味するものではなく、むしろ自然神学的建築術と、創造の信仰箇条との関係の、批判的切断を意味している。先に見たように、批判的理性にとって、創造神の存在は思弁的ではなく道徳的実践的に要請されるべきものとなっていた。信仰のための拠点がここ(実践)に見いだされたことにより、批判的世界建築術の思想(思弁的観想)は、いわば身軽になって、その本領を自然神学ではなく、自然哲学ないし自然研究に定めることになる。

この「(自然神学的)証明は、つねに尊敬の念をもって呼ばれるに値するものである。これは、最も古く、最も明瞭で、通常一般の人間理性に最も適合した証明である。これは自然の研究を生気づけるが、おなじくまたこの証明自身もその存在を自然の研究に負っており、自然の研究によつていつも新たな力を獲得する。この証明は、われわれの観察によつては目的と意図がおのずと発見できなかったであろうところに、目的と意図を持ち込み、その原理が自然の外にある特殊な統一を手引きとして、われわれの自然認識を拡張する。しかるにこうした知識は、

その原因、つまりその「知識の」機縁となった理念へと、逆にふたたび影響をおよぼして、ある最高の創始者による信仰を、不拔の確信にまで増大させる。／それゆえ、この証明の威信をいささか傷つけようとしたところで、それは絶望的であるのみならず、まったく徒労でもあろう。理性は、かくも強力な、自分の手中でますます成長してゆく証明根拠、とはいえたんに経験的なこの証明根拠によって、不断に高められ、かくして理性は、精緻な抽象的思弁のいかなる懷疑によっても抑圧されることはない。それゆえ、理性が自然の奇跡と、世界建築の威厳とに一瞥を投げかけるとき、理性は思い煩うあらゆる優柔不断から脱するのであるが、それはまるで夢から覚めるかのようにであり、かくして理性は、大いなるものから大いなるものへ高まり、ついにはこのうえもなく偉大なものに到達し、条件づけられたものから条件へと高まつて、ついには最上の無制約的な創始者にいたるのである。(A623:4=B651-2)

あの批判の核心を語る直前の箇所で、カントはこのように自然神学的思考にきわめて好意的に、しかもかつての思弁の若い血潮を彷彿とさせるような勢いで、信仰に「不拔の確信」をもたらす論証の威力についてさえも語っている。

自然の技術としての建築術——カントの体系思想

しかし私はここに、カントの批判の不徹底よりは、むしろかえってその理性批判の冷徹なまでの鋭利さを見ることにしたい。なぜならば、カントは、「多様性、秩序、合目的性、美」をあまねく湛えた自然的世界の「奇跡」を前にして、「われわれの判断が、言語を絶した、しかしそれだけにいつそう雄弁なる驚嘆 *Erstaunen* のうちに消え入らざるをえなく」(A622=B650)とこう、圧倒的な崇高感情に包まれた地点に今なおありながら、それでもあえて、あの批判を敢行したのだからである。

ふたたび本題にもどっていえば、ここでカントは、世界建築術を「われわれの自然認識」、しかも目的論的な経験的自然研究との密接な連関のもとに位置づけようとしている。素材となる物質からはへ自由な生ける自然を奪われ、しかも自然ならざるへ人間の技術とのアナロジーのもとに置かれざるをえなかった批判的世界建築術は、ひとまず自然から遠ざけられたかに見えたが、ここに新たに、われわれ人間の目的論的世界認識という文脈で、自然(ただしさしあたりは認識対象としての自然)との強い韌帯を確保する。以後、批判哲学において、とりわけ『判断力批判』において、世界建築術は第一義的に自然認識・自然理解・自然解釈の問題となり、われわれを自然の感性的 *ästhetisch* 観想と学的研究とに駆り立てる「自然の合目的性」そのもの

のが、考察の主題に浮上してゆく。

批判的世界建築術は、世界建築家と世界創造者の区別によって創造神から引き離されたが、そのことによって自然とのよりいっそう密接な関係を獲得したのだといえる。そして、少しばかり性急ではあるが結論を先取りしていえば、神というかつての協働主体の一方を失った世界建築術は、批判の完成期には自然を本来的な主体として、「自然の技術 *Technik der Natur*」として語り出されることになる。

『純粹理性批判』で理性の世界認識の学的建築術の根底および背景へと退いた世界形成の建築術は、『判断力批判』で、神ならぬ自然の世界建築術として復活し、世界認識の学的建築術との二重奏の旋律に乗って、ふたたび舞台の前面に踊り出る。自由で生き生きとした自然の世界建築術。『判断力批判』の「自然の技術」の概念は、若い日のカントの壮大な思弁的自然哲学の、批判的な取り戻し *Wiederholung* にはかならない。

## 十二、自然の技術としての批判的建築術

ただし、そのような地点に到達するまでには、カントにはまだかなり骨の折れる批判の作業が必要であった。へ自由な生ける自然」とは、物（ここでは物質）の内なる本質・

本性を意味したが、批判的理性は、もはやこれを直接的に語ることが許されないからである。

『判断力批判』は、認識批判によって（近代的な）人間理性の手許から奪われたものをふたたび取り戻すべく、物の内なる自然へと少しずつ肉薄してゆこうとする、批判的理性の苦しい思索の努力の跡を示している。かなりおおづかみにいえば、それはまず、存在する物の外的表面の美しい形に接する感性的で反省的な純粹趣味判断の分析に着手したうえで、さらに自然の有機的身體内部の合目的分節構造に分け入ってゆき、こうした空間的な物の外から内への接近の勢いを借りて、さらにあの有機的自然本性という本質的内面へと反省的に迫ろうとするものである。

批判的理性にこうしたへ物の内奥への観入をかるうじて可能にするものは、しかし、人為技術と自然とのアナロジーよりほかにはありえない。もはや他には手立てがないところで、カントは技術アナロジーによる自然理解の有効性と限界を一つ一つ見極めながら、失われた自然の有機的形成力の批判的解釈学的な回復をめざして、一步一步地道に進んでゆく。その途上には、機械論原理と両立可能な目的論的自然認識の原理のかたちを求める、徹底的な批判という課題が立ちはだかっている。しかもカントはそれに先立って、美と目的論的完全性——これらは第一批判の世界



建築思想でもなお一体のままに扱われていた——をひとまず切り離し、美としての美を純粹に感性的な反省の事柄とし、有機的自然の目的論を理性的な反省の事柄として区別するという、批判の基礎作業に取り組まなければならなかった。<sup>(52)</sup> 技術としての自然、あるいは自然の技術という思想は、そのようにして次第に批判的に鍛え上げられていったのである。

本稿は、カントの建築術の思想が、そうした「自然の技術」概念の生成を準備する母胎にあたることを確認するために、批判以前の『天界論』にまで遡って考察を進めてきた。最後に、この件に関して、若干の重要な補足事項を述べておきたい。『純粹理性批判』のカントは、あの「世界建築家」と「世界創造者」の批判的区別を提示する直前の段落で、まさに自然と技術とのアナロジーをめぐって、以下のように論じている。

ここで、自然的理性の推論について、そのあげ足を取ることはやめておく。つまり、この「〔自然神学的〕推論において自然的理性は、いくつかの自然産物と、人間的技術が産出するもの——そのときそれ〔人間的技術〕は自然にたいして暴力をふるい、自然を強制して、自然をその諸目的にしたがつてふるまわせるのではなく、むしろ

自然がわれわれの諸目的に従うようにしむける——とのアナロジー（自然産物と家屋、船舶、時計などとの類似性）にもとづいて、まさにそのような〔技術的〕原因性が、つまり悟性と意志が、自然の根底に横たわっているのだと推論している。ところで、このとき自然的理性は、自由にはたらく自然、*die freiwirkende Natur*（これはすべての技術を、そしてさらにはおそらく理性をも初めて可能にするものである）の内的可能性をさらに、ある別の超人間的な技術、*eine andere, obgleich übermenschliche Kunst* から導出しているのである。

しかし、そうした推論の仕方は、このうえなく鋭い超越論的批判には、おそらく耐えられないだろう。とはいえ、以下の点は認めなければならぬ。すなわち、われわれがある原因を挙げること求められるのだとしたら、ここでは、われわれがその原因と作用様式とを完全に知っている唯一のものである、この合目的諸産物〔人間的技術の産物〕とのアナロジーにしたがう以上に、いっそう安全なしかたで振舞うことはできない。理性は、自分が知っている原因性から、自分が知らぬ曖昧で証明不能の説明根拠へと移行しようとするとき、自分自身で、その責任を負うことはできないだろう。（A626=B654）

のちの『判断力批判』で本格的に抱え込むことになる課題をすでに先取りするかたちで、ここにカントは、技術アナロジーそのものの本質的な批判に着手している。そしてそのとき「人間的技術」については、物に対するその外在性に関連して、「それは自然にたいして暴力をふるい、自然を強制して、自然をその諸目的にしたがってふるまわせるのではなく、むしろ自然がわれわれの諸目的に従うようにしむける」と、鋭い批判的見解を表明している。この「強制」は、現象としての物一般へのア priori な認識形式の「強制」という超越論的認識論の中心的論点とも重なって、その批判的意義はきわめて大きい。<sup>54</sup>そしてまた、『判断力批判』の遂行する物の内なるへ自由な生ける自然への反省的肉薄が、経験的・超越論的に重層する技術的「強制」からの自然の解放を企図した、自然解釈の試みとして捉えられうるであろうことが、そこから期待できるのである。くわえて、カントはここで、かつての『天界論』も依拠していたであろう「自然的理性の推論」が、「自由にはたらく自然の内的可能性」を、「ある別の超人間的な技術」から導出しようとするものであったことを指摘している。批判的にはもはや直接的推論によって到達不可能となったその地点が、ここで明確に「自由にはたらく自然」といわれ、さらにその根拠が「ある別の超人間的な技術」と名指

されていることは、「自然の技術」としての批判的世界建築術という思想の芽生えの兆候として、きわめて注目にする。世界建築家と世界創造者の批判的区別には、それに先立って、人間的技術と超人間的技術との乖離の徹底的な自覚が必要であった。こうした苦い自覚を噛み締めながら、『判断力批判』は、やむなく人為技術とのアナロジーを手引きにして、近代という時代にはもはや失われざるをえなかった「超人間的技術」との韌帯を、「自然の技術」の概念をとおして、少なくともわれわれの自然理解・世界認識の建築術において、次第に回復しようとするのである。こうした観点からも、あらためて『判断力批判』の建築術的解釈の試みが必要となってくる。

## 結 語

カントの理性批判の哲学全体は、今まさに来らんとする新たな形而上学の、体系建築の基礎づけをめざした学的建築術の遂行である。その建築術は、『天界論』で如実に示された神と自然との協働的な世界建築術を、いわば批判的認識論的にミメシスしたものであり、しかもそれは、人間理性の自然本性に即したへ自然の技術といえるものであった。批判哲学のこうした全体構想のもとに、『判断力批判』における自然世界の反省的目的論的解釈の建築術は、

あの『天界論』で示された世界形成の建築術と、『純粹理性批判』で提示された世界認識の学的建築術の構想とを、反省的判断力の認識批判を介して、批判的に総合したものだともいえるかもしれない。その総合の韌帯となるものは「自然の技術」であり、このアナロジー概念は、あの世界建築術の認識論的ミメーシスと、とりわけそのミメーシスの自然的性格とにかんする、本格的な批判的反省の場をわれわれに提供するものである。『判断力批判』は、このようにして批判哲学体系全体の最終設計の批判的吟味に携わるものであり、その意味でまさしく理性批判の完結篇となるべきものである。『判断力批判』の建築術的解釈は、おおよそこうした展望のもとに展開されねばならないだろう。

こうした全体的展望のもとに、本稿において、少なくともカント理性批判の学的建築術の自然的性格を確認できたことを、さしあたりの中間的成果の一つとしてあげることが許されるとするならば、この件に関連して、さらに一点だけ付け加えておきたいと思う。カントはその学的建築術について説明するさいに、「経験的」で「偶然的」な「技術的統一 *technische Einheit*」と、理性の全体的な「理念」に依拠した「アプリアリ」な「建築術的統一 *architektonische Einheit*」とを対置している(vgl. A833-4=B861-2, A834-5=B862-3, A847=B875)。<sup>4</sup> 二つにわれわれ

は、カントの批判的建築術がたんなる技術を越えたものであり、しかも理性の自然本性に即した(アプリアリはその意味に解しうる)自然なものであること、その意味でいわば自然の技術なのであることを、重ねて確認することができる。それにくわえて、この技術的統一と建築術的統一との区別が、あくまでもアナロジカルにはあるが、哲学の「学校概念」と「世界概念」との区別に重なるものであることを、指摘しておきたい。学校概念に従った哲学は、数学、自然学、論理学と同様に、理性の知的熟練に寄与する技術的な性格のものにすぎない。これにたいして、世界概念という観点において「哲学とは、あらゆる認識を人間理性の本質的な諸目的に関係づける学問(人間理性の目的論 *teleologia rationis humanae*)であり、哲学者は理性の技術者ではなく、人間理性の立法者である」(A839=B867)。天文学・宇宙論の文脈にある場合には「宇宙」および「宇宙論的」とも訳される“Welt”および“kosmologisch”を、本稿はあえて徹底して「世界」および「世界論的」と訳出してきたが、このことは、この「世界概念にしたがった哲学」というカントの基本的哲学観を、本稿の全体的展望としてつねに自覚していたからにほかならない。このことを最後にことわって、二つにひとまず筆を擱くことにしたい。

## 註

カントのテキストからの引用にさいしては、原則として本文中の括弧内に、アカデミー版全集の巻数（ローマ数字）と頁数（算用数字）を記すことにする。ただし、『純粹理性批判』は慣例に従い初版をA、第二版をBと略記して、その頁数を記す。

(1) 以下、とくにことわりのないかぎり、引用文中の強調はいずれも引用者によるものである。なお、本拙稿では、カントのテキストからの長い引用とその読解という、基礎的な作業を遂行するかたちで論述をすすめる。カント哲学の建築術的な解釈ということ自体が、その重要性は認識されておりながら、あまり積極的に取り上げられてこなかった論題だからである。また、カントのテキストからの引用にあたっては、あえて新たな拙訳を試みた。従来の各訳業に多くの恩恵を被りながらも、さらにそのテキストの「建築術的な含意」を、原語もまじえてより一層明確にするため、そして日本語として少しでも通りのよいものに改良するために、である。なお訳文中の亀甲「」内には、一つの原語に対応する複数の訳語候補を挿入したり、引用者による訳注を施したりした。

(2) カントの「自然の技術」という主題に関して、筆者自身はこれまで、すでにいくつかの論考を発表してきた。さしあたり『判断力批判』のテキスト解釈から出発した本研究は、あらかじめある程度の子感があったものの、しかし今回まったく思いもかけない仕方で「建築術」概念との密接なつながり

を見いだして、カント哲学構想の全体にも及ぶきわめて大きな広がりをもつにいたった。筆者はこのことにただ驚くばかりであり、体系論・建築術との関連で「自然の技術」という論点を強く打ち出した研究書を、寡聞にしてまだ知らない。

(3) 第一批判以外にも、たとえば『論理学』序論Ⅵ節「認識の特殊な論理的完全性」の末尾に近き箇所(IX 48-9, vgl. 93)や、『人間学』第59節の「天才」としての「建築術的な頭脳」——この点は「自然の技術としての建築術」という論題とも密接にからむ——に関する記述(VII 226-7)、そして『自然地理学』の序論第二節(IX 158)を参照。

(4) これに関して筆者は一度、かなり以前に論じたことがある。拙稿「カントにおける体系的統一の思想」(『関西哲学会紀要』第21冊、一九八七年)を参照されたい。そのさいに主として参照したものは、Heinz Heimsoeth, *Transzendente Dialektik. Ein Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, T. 1-4, Berlin 1966-71および Helga Mertens, *Kommentar zur Ersten Einleitung in Kants Kritik der Urteilskraft*, München 1975であった。さらに今回、本拙稿の執筆にあたってきわめて啓発的であった研究文献として、以下の二点を挙げておきたい。石川文康「カントの体系論」(同著『カント第三の思考 法廷モデルと無限判断』名古屋大学出版会、一九九六年)。Tassilo Eichberger, *Kants Architektur der Vernunft*, München 1999.のうち、アイヒベルガーのカント建築術研究は、考察の焦点を第一批判の超越論的認識論の建築術メタファーの解明という点に絞り、

ルネサンスの中心点遠近法（一点透視図法）を念頭においたカントの叙述の詳細を跡づけることを主眼としている。カント哲学全体を包括するような考察の広がりや欠くという恨みはあるものの、アイヒベルガーは、ポストモダンの建築論が近代建築および遠近法の暴力性を指摘しているのに関連して、カントの建築術構想の暴力性を否定しようと努めており（vgl. S.190ff.）、抜かりはないようである。私のみるところ、この点に関しては「建築作品と自然産物とのアナロジー」か、それともそこにはたらく「自然と技術とのアナロジー」か、という区別が重要だと思われるが、ポストモダンの近代建築批判は多くの場合に前者のアナロジーに依拠し、それに対して、アイヒベルガーはカントの建築術メタファーにおける「理性の力動性」に着目することによって、後者のアナロジーに接近している。そしてのちに本論で見るように、カント自身もまた、伝統的な自然神学的思考における作品どうしのアナロジーから、第三批判の自然と技術のアナロジー（「自然の技術！」）へと前進することによって、物の内へと肉薄し、世界認識における人間理性の「自然な建築術」を展望することができるようになったのである。

(5) これに関連して、C. A. van Peursee『ポストモダンズムを超えて——形而上学から哲学的シュールレアリズムへ——』吉田謙二訳、晃洋書房、一九九六年（原著一九九四年）が興味深い。ペールセンは今日の思想的時代状況におけるカント的批判の意義を指摘しながら、さらに独自の道を切り開こうと模索している。

自然の技術としての建築術——カントの体系思想

(6) 高橋哲哉『デリダ 脱構築』講談社、一九九八年、および『岩波 哲学・思想事典』の同氏による「脱構築」の項目を参照。なお、本拙稿ではデリダとの批判的対話を本格的に展開することはできなかった。他日に期したい。

(7) 「形は機能に従う」をスローガンとする機能主義の近代建築が、その用途の限定性のゆえにかえって融通の利かない頑固さをもち、これに対して、中世やルネサンス期の修道院や邸宅などが今日では美術館に用いられるというような柔軟な改造転用の妙を示している点は、きわめて興味深い。この点もふくめて、いわゆる「近代建築」の数々の問題点については、P. ブレイク『近代建築の失敗』星野郁美訳、鹿島出版社、一七七九年（原著 *Form Follows Fiasco. Why Modern Architecture Hasn't Worked*, 1974.）を参照。

(8) それは皮肉にも、日本における技術合理主義的な「近代建築」の胎動期にあたる。稲垣栄三『日本の近代建築「その成立過程」』上・下、鹿島出版会、一九七九年、および井上章一『つくられた桂離宮神話』講談社、一九九七年（初出、一九八六年）を参照。

(9) タウト『建築藝術論』岩波書店、一九四八年、参照。「技術は、建築物を、鞏固にして、風雨や寒暑に備へ、構造は建築物を堅牢にして自然の暴威を禦ぎ、また機能は建築物を使用する人々にあらゆる點で利便と快適とを與へる。／さてかう考へてみると、建築にはこの三位一體——即ち技術・構造及び機能以外の前提はまったく存在しないかのやうに見える。／然しもつと深く考へてみると、これだけではないけないので

ある。建築が眞に一個の藝術であるならば、このような味氣ない概念が建築の前提であつてはなるまい。況んや建築が技術や構造或は機能に依存したり、またかかるものによつて作り出される筈はないのである。」(四頁)という、タウトの批判的精神に注目したい。さらに同著『建築とは何か』(鹿島出版会、一九七四年)、および『続 建築とは何か』(鹿島出版会、一九七八年)をも参照。なお、上記三著の訳業はいずれも、カントの主要著作の翻訳者でもある篠田英雄による。またさらに、有機体論的な建築の今日的な可能性に関しては、杉本俊多『建築の現代思想 ポストモダン以後のパラダイム』鹿島出版会、一九八六年を参照。

(10) 有機的組織化のアナロジーの政治的共同体への適用の事例として、とくに『判断力批判』第二部第六五節の脚注(V 375)が、注目に値する。

(11) ここで「最後の障害」と思われたものは、けっして最後のものではなかった。カントは翌年、一七七七年八月二〇日付けの同じヘルツ宛の書簡のなかで、「あなたとお別れしたとき以来、以前には部分的に哲学の各種の対象に向けられていた私の諸研究は、体系的形態を獲得してまいりましたし、私を徐々に全体の理念へと導いてくれました。この理念が、価値についての判断と諸部分の相互的影響をはじめ、可能にするものなのです。しかしこの仕事を完成するには、私が純粹理性批判と呼ぶものが、石のように途上に横たわっておりまゝです。」(X 213)と述べている。第一批判の完成にいたる道はまだまだなお険しい。しかも、ここで「この仕事の完成」が形

而上学の体系そのものの建立を意味するのだとしたら、批判とは、まだその途上の一里塚である。ともあれ、カントの「諸研究」の「体系的形態」は次第に確実に整備されつつある。われわれはこの「沈黙の十年」の思索の過程を、へ批判の体系への建築のための、設計の試行の積み重ねとして受けとめることができるだろう。

(12) 第一批判の刊行の年、一七八一年五月十一日以降の日付けのものと推定されるヘルツ宛の書簡においてカントは、「あなたのような方だけは、私の体系の次のような概念、つまりそれだけが私の体系の価値についての決定的な判断を可能にするような概念に、到達されることを望みうるのです。……してみると私の著書は、……われわれにきわめて関心のある人間的認識のこのような部分において、思考法の全体的な変容 (eine gänzliche Veränderung) を引き起こすものにはかならないのです。」(X 269)と書いている。

(13) カントはこの論題を、とくに批判期の人種論文(一七八五年の「人種の概念の規定」、および一七八八年の「哲学における目的論的原理の使用について」)において、熱心に取り上げている。そしてこの作業が『判断力批判』の成立につながっていったのである。

(14) それはまた数々の論争によって促進された。カントはただ一人ですべてを思考したのではなく、時代を同じくする多くの人びととともに、そしてまた過去の偉大な哲学者たちとともに、いわば哲学的討議の公開の場に身を置きつつ、批判的思考の糸を紡ぎだしていったのである。

(15) 書簡集などの資料からも容易にうかがえるように、そもそも三批判書のすべてが、当初予定されたタイトルの変更を余儀なくされているし、とりわけ第三批判の形成途上においては、カント哲学体系構想そのものに関して、理論と実践の二本立てから、目的論を含む三本立てへ、という設計変更の可能性までもが検討されているのである。

(16) カントとランベルト(Johann Heinrich Lambert, 1728-77)の関係については、以下の諸文献を参照。高峰一愚「解説『天界の一般自然史と理論』(理想社版『カント全集 第十巻』一九六六年)、石川文康「カントのコペルニクスの転回」(『カント読本』法政大学出版局、一九八九年)、同「ランベルト」(『カント事典』弘文堂、一九九七年)、同「カントの体系論」(前掲)、そして中島義道「ランベルトの現象学」(『講座ドイツ観念論 第一巻』弘文堂、一九九〇年)。

(17) カウルバッハによれば、「ランベルトの『建築術の設計構想』は『基礎論』であり、ヴォルフやバウムガルテンの場合のように、存在者に関する仕上がった教説としての存在論ではもはやなく、むしろ人間的認識の建築物の基礎づけ、つまり単純な基本概念と公理に関する教えとなっている」

(*Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd.1, S.502)。  
存在論そのものの建築に先立って、その建築術の認識論的計画を立て基礎を定礎するものとして、『建築術の設計構想』は、人間的認識の基本原理の吟味・批判に携わっている。この認識論的批判という点で、ランベルトの『建築術の設計構想』は、カントの批判、すなわち形而上学の体系の建築に先

立つ準備作業としての批判の先駆とみなしうる。そしてカント批判哲学のあの二重の建築術的性格は、いわば時代の学的建築術の思想の変異を、批判的に反照したものだといえることができる。

(18) ランベルトには『世界建築の設備に関する宇宙論的書簡』(*Cosmologische Briefe über die Einrichtung des Weltbaues* Ausgefertigt von J.H. Lambert. Augsburg 1761)という著作もあり、これがカントとの、往復書簡等を通じての交渉のきっかけにもなっている。

(19) ライプニッツ『人間知性新論』第四部、第三章、第二七節(工作舎版『ライプニッツ著作集』第五巻、一七二頁)を参照。

(20) カッシーラー『カントの生涯と学説』(みすず書房、一九八六年〔原著一九一八年〕)の第六章に示された、哲学史的背景からカントの思想の核心を照射する『判断力批判』の解釈は、この批判書の入門書としても研究書としても、最良のものの一つであると思われる。さらに当該思想伝統の詳細については、あの著名なアーサー・O・ラヴジョイ『存在の大いなる連鎖』(内藤健二訳、晶文社、一九七五年〔原著初版、一九三六年〕)も参照。

(21) そして魂(自己)——世界——神という「超越論的弁証論」の上昇的弁証法的論述構造は、いわば世界を伸立ちとして、神と自己とが批判的に向き合い対話することを、企図しているのかもしれない。

(22) 岩波版『カント全集』第2巻(宮武昭訳)は「学的理論体系」を意味する *System* を *Lehrverfassung*, *Lehrbegriff* と

ともに等しく「学説」と訳出しているので、その邦訳からは窺い知ることができないが、カントは、彼自身や他の天文学者の理論学説を多くの箇所では System と呼んでいる(vgl. I 22, 232, 240, 255, 268, 271, 277)。そして、衛星系、惑星系、恒星系、普遍的世界体系等、天体の物理運動の体系的秩序を表わす System の用法は、枚挙に暇がないほどである。

(23) 同じく全集の翻訳では、Weltbau は「宇宙構造」、Weltgebäude はたんに「宇宙」とするなどとして、天文学ないし宇宙論の科学的文脈のほうを際立たせているが、拙稿ではこれらを神の世界建築術の文脈でとらえて、あえて「世界建築」および「世界建築物」と訳出することにした。

(24) 多くの名だたる研究者たちが、批判期カントの思弁の抑制を惜しみ、若いカントの思弁の瑞々しい魅力について、熱く語っている。カントの神信仰を必ずしも共有しない私も、その思弁の魅力を否定しない。しかしまた、カントが批判期以後にその信仰を変えたとも思っていない。信仰に場所を空けるために知を限る。批判の以前にも以後にも、カントの神への信仰は本質的に変わっておらず、ただ純粹理性の思弁の力の評価と、事柄の哲学的表現法とが、批判によって大きく変貌をとげたのである。そして私は、その強い神信仰にもかかわらず、あえて思弁の独断的飛翔を抑制した理性批判こそ、やはりカント哲学の本領はあったと考えるし、またその点に、より一層の思想的な魅力を感じている。しかも、カントはその批判によって、彼の若い思弁を突き動かしていた本質的なものと訣別するのではなく、むしろそれを(とりわけ『判断

力批判』の「自然の技術」によって)正しい場所に位置づけて救済したのだと確信している。

(25) ちなみにアルキテクトーンの独訳語は今日では一般に Baumeister であり、アルヒテクトーニクは Baukunst である。

(26) 今日、建築家は主として設計に従事し、実際の施工は現場監督を中心に建設業者が行うという分業体制が支配的であるが、ここで神は、古代ギリシアのアルキテクトーンと同じく、設計と施工の両面にわたるアルコーンとして、建築家であり棟梁である。

(27) 自然の機械論と目的論という問題に関連していえば、ここで自然は神の創造の協働主体であるがゆえに、機械論的かつ目的論的であって、けっして純粹に機械論的なのではない。ともかく、若いカントの世界建築術における「神と自然との本質的な近さ」は、きわめて注目にあたいする。

(28) カントが道徳的定言命法の「自然法則の定式」を語るとき、それはたんに法則の「普遍性の形式」における同型性をいうのみならず、さらには暗に「自然法」の伝統思想をも念頭においているのではないかと、私はおぼろげに推察している。『道徳形而上学』法論の批判的自然法思想の展開の精査とあわせて、別の機会に論じることにはしたい。

(29) カントはそこに、神の力の偉大と無限性、強力と全能を認めるのである。「人びとは、自然における調和、die Übereinstimmungen、美、die Schönheit、目的、die Zwecke、そして目的と手段の完全な連関を指摘したり強調したりしがちである。しかしな



がら、かれらは自然をこの面では褒めそやしながらも、他方では蔑視しようとする。かれらに言わせれば、この調和は自然とは無縁であり、自然は普遍法則にしたがうだけでは、無秩序しか生まないだろう。これらの調和には、自然とは無縁な手 *eine fremde Hand* が垣間見えるのであって、この手のおかげで、あらゆる法則性を欠いた物質も、知恵深き計画 *ein weiser Plan* に従わざるをえなくなったのである。しかし、私はこれにたいしてこう答えよう。もし物質の普遍的作用法則が同時に至高の企図 *der höchste Entwurf* からの帰結であるとするれば、その法則の使命はおそらく、最高の知恵がたてた計画を自分からおのずと *von selber* 成就しようとするに努めることにほかならないだろう、と。もしそうでないとすれば、われわれはつぎのように考えなくなるのではないだろうか。つまり、少なくとも物質とその普遍的法則は独立しており、全知の力はこの物質とその法則をこれほどみごとに使用するわざを心得ていたとはいえ、しかしその力は、なるほど偉大ではあるにしても無限ではないし、なるほど強力ではあるにしてもすべてを満たしているわけではない、と。」(I 223)。

信仰を擁護する人びとが、物質およびその法則を神から「独立」させ引き離すことによって（そしてまた自然主義者、とりわけ「神の最初の一撃」においてはあのニュートンさえもが自然と神とを無縁で異的なものとすることによって）、美しい神的な秩序の形成を外的・強制的なものとしてしまった。これにたいしてカントは、神意を物質の法則に近しいものとすることによって、いわば物質をあの強制から解放し、

秩序形成を自然物質に内的かつ自発的なものにするのである。

(30) カウルバッハ「カントとニーチエの自然解釈」小島威彦訳、明星大学出版部、一九八二年、および同著「行為の哲学」有福孝岳監訳、剋草書房、一九八八年（原著一九八二年）を参照。ここでカウルバッハが注目している自然概念の区別はきわめて重要である。しかし彼は別のところで、当該区別を「現象と物自体」の区別に対応させている（同著「純粹理性批判案内——学としての哲学」井上昌計訳、成文堂、一九八四年（原著、一九八一年）。残念ながら、この短絡した見方にかぎっては同意することができない。

(31) ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)。イギリス古典主義の詩人。当該詩句は、ライプニッツ「弁神論」のオプティズムを祖述した哲学詩「人間論」(*An Essay on Man*, 4 vols., London, 1733-34)の第三書簡第一連からのもの。カントの引用は同書の独訳(B.H. Brookes, 1740, S.59)による。ちなみに引用の最終行は原詩では、「一つの静止する中心たる普遍的善に向けて突き進む *Press to one centre still, the gen'ral good.*」である。

(32) これに関して、スピノザは能産的自然の徹底的な機械論を展開し、ライプニッツは形而上学的目的論と自然学的機械論との二元論で応戦した。カントはこの延長線上で、自らの「自然」概念を鍛え上げることを強いられたのである。

(33) ここにまた、本書におけるカントのニュートン批判の要点がある。「ニュートンの原理に従って」という本書副題の文言から推察して、ニュートン力学の機械論の徹底と見られた

ものは、しかしその実、物質に本質的な擬似生命原理を主張する、目的論的物体観の復活なのであった。この件に関しては、岩波版『カント全集』第2巻の「解説」における植村恒一郎（四九一頁）および宮武昭（四九七―九頁）の有益な指摘を参照。

- (34) 「自」形成する自然の素材を運動へともたらした駆動装置（das Triebwerk [衝動・欲求・欲動の仕掛け]）を見いだすことは、ここでははや難しくない。もろもろの物質素材の結合統一をもたらした動因（der Antrieb [原動力・動機・誘因・推進力・衝動]）そのものは、牽引の力〔引力〕であるが、これは物質に本質的に備わっており、wesentlich beiwohnt、自然の最初の活動にあたって、自らその運動の第一の原因となるものなのだから、これが運動の源泉だったのである。」（1339, 40）

- (35) カント全集の理想社版でも岩波版でも「跳躍力」と訳出された「躍動力 Schwingungskräfte」は、「活力」とも「活気」とも「生氣」とも訳すことのできるものである。若いカントの天界論に頻出する天体の「躍動力」は、彼にとって、物質の引力、斥力の概念とともに、あるいはそれ以上にきわめて重要なものであり、カントは以下のように述べている。「すでに何度か述べたように、宇宙空間は空虚である。あるいは少なくとも無限に希薄な物質で満たされている。したがってこの物質には、共通の運動を諸天体のうちに刻印する手段などなかった。この難点はきわめて重要かつ正当だったから、自分の世界知の見解に当然の自信をもっていたニュートンでさ

え、この難点を解消する希望を放棄せざるを得なかった。すなわち、他のすべての現象が一致して機械的起源を示したにもかかわらず、惑星にそなわる躍動力の刻印 Eindruckung を、自然の諸法則と物質の諸力とによって説明するという希望を断念せざるをえなかった。単純な基本諸法則からかなりかけ離れた複雑な諸性質に関しては探究の苦勞を放棄して、神の直接的な意志を持ち出すことで満足すること、これは哲学者たるものには悲しむべき決心である。しかるにニュートンはここに、自然と神の指とを分け、自然の諸法則として採用されたものの運行と神の目配せとを互いに分かつ限界線を認めた。かくも偉大な哲学者が絶望したあとでは、このように困難な事柄においてなおも幸運な前進を希望することは、僥越とも思われる。／しかしながら、あのニュートンに希望を失わせたまさにこの困難、すなわち、諸天体に与えられた躍動力、世界建築の体系的なものはこれの方向と諸規定とによって形成されるのだが、その躍動力を自然の諸力から概念把握するという困難こそが、前章までにわれわれが述べてきた学説体制の源泉なのである。」（1338, 9）。

- (36) カントの「有機的」の語の使用について、詳細は拙稿「カントの有機体論——「生命」の概念をめぐる——」（『文藝と思想』第62号〔福岡女子大学文学部紀要〕一九九八年）を参照されたい。

- (37) 杉本俊多、前掲書、六七―六八頁、参照。

- (38) 前掲拙稿「カントの有機体論」を参照されたい。

- (39) 『唯一可能な証明根拠』には、〈自然の技術〉のモチーフが

よりいっそう顕著にあらわれているが、これについての論考は他日を期したい。

- (40) 一七九一年四月一九日付けのゲンジヒエン宛のカントの書簡、参照。

- (41) 岩波版『カント全集』第14巻所収の同論文の拙訳および注解、解説を参照されたい。

- (42) ちなみに、それに先立つ分析論までのテキストは、総じてアリストテレスのカテゴリー論との経験的認識論的な対話だったといえる。

- (43) そこからして、そもそも第一批判のめざす基礎づけが、第一義的には理論認識ではなく、むしろ道德のそれであるとさえいえるほどである。

- (44) ただし、一七八一年の初版刊行当時、カントはまだ、あの自然史と自由史との批判的区別の手前にいる。

- (45) なぜならこの図式はカントにおいて、少なくとも現象界に關していえば、けっして当初から成立しているのではなく、むしろ超越論的統覚と超越論的客観との相関関係の必然性が論証され終わって初めて、つまり超越論的分析論の結論として、しかもただ経験的認識の客観性を保証する理念的枠組みとしてのみ、意味を持ち始めるものだからである。

- (46) ハンス・アルバート『批判的理性論考』萩原能久訳、御茶の水書房、一九八五年〔原著、一九六八年〕参照。

- (47) カントの道德法則の「基礎づけ」の性格に關しては、拙稿「技術理性は批判すべきか——道德性の批判的パースペクティブの正当化——」〔『道德規範の妥当根拠の総合的究明』平成

2年・3年度科学研究補助金総合研究A〔課題番号02301006〕研究成果報告書、一九九二年、所収〕を参照されたい。

- (48) これと同様にして、『プロレゴメナ』（一七八三年）の第五〇節では、アンチノミー論の扱う「宇宙論的理念」について、「純粹理性が、その超越的使用において作り出したこの産物は、純粹理性の最も注目値する現象である。この産物はまた何よりも強力に働いて、哲学をその独断的なまどろみから目覚めさせ、理性そのものを批判するという難事に向かわせるものである。」(IV 338)と言われている。

- (49) そして、「独断のまどろみ」という批判哲学の成立にとつてきわめて重要なフレーズをも含むこの二つのテキストの関係、とりわけアンチノミー論と因果性概念への懷疑との関係が、一つの解明されるべき謎として、しばしばカント研究の論題になってきた。たとえば石川、前掲書、一二〇—二六頁、参照。

- (50) カントがその学的建築術の基礎工事を、自然素質 *Naturanlage* としての形而上学から、学としての形而上学へという仕方で行く進めようとしている点は、われわれのへ自然の技術としての建築術へという論題とも關係して非常に興味深いことであるが、ここではひとまず脇に置く。

- (51) 問題の「世界建築家」と「世界創造者」の区別が、すでに六三年の『唯一の証明根拠』(vgl. II 122ff.)に登場しているという点も含めて、その間の自然神学的思考の細かな批判的変異の実態については、あらためて考察したい。

- (52) 『判断力批判』の第一部と第二部とを体系的統一のもとに

解釈することは、これまでの研究史においても長らく重要な課題であったし、筆者自身も第三批判の研究を、この問題の解明に参与するというかたちで開始した。しかしここではむしろ、第一部と第二部のつながりにわれわれが疑問を感じることも自体が、実は美学と生物学等が明確に独立分化を始めた十九世紀以降の歴史的事象にすぎないこと、そしてカント自身にとっては、伝統的な自然神学的思想を背景にして、美と有機的完全性とはもともと同一の相において把握されていたこと、それを批判的理性はあえて一旦原理的に切断したうえで再び批判的に総合するという必要に迫られたのであり、第三批判の第一部と第二部の分節は、まさにこの理性批判の徹底という意味合いにおいて理解されなければならないということ、を確認しておきたいと思う。

(53) 「それ」は人間的技術をさす。既存の邦訳のうち、天野貞祐（講談社学術文庫版）訳はこの読み方をとっていたが、篠田英雄（岩波文庫版）訳および原佑（理想社版全集）訳はこれを「理性」ないし「自然的理性」と読んで、あの批判的含意を見にくくしてしまっている。

(54) この点に関しては、拙稿「自然美の批判的意義——カントの超越論的趣味批判を手引きにして」（『文藝と思想』第58号、一九九四年）を参照されたい。